

札幌市文化財調査報告書 XXXIII

K 36 遺跡

1987

札幌市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、昭和61年6月2日から6月19日まで実施した札幌市北区23条西14丁目6-1の店舗造成事業にともなうK36遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、札幌市教育委員会文化課の上野秀一・羽賀憲二が当たり、執筆は両名で分担した。
- 3 発掘調査及び整理業務には、下記の人々が従事した。

田部 淳、田村リラ子、今田瑞恵、阿波みゆき、小竹昌子、山本泰子、鈴木陽子、中川由美、平野井司、石本恵理子ほか
- 4 発掘調査・整理において下記の人々より助言と協力を賜わった。

北海道教育庁文化課
札幌市文化財保護審議会委員 大場利夫
北海道大学 吉崎昌一、横山英介
大井晴男、天野哲也
トロント大学 ゲーリー W. クロホード
北海道開拓記念館 赤松守雄
- 5 発掘・整理作業、報告書出版については、熊野豊士・熊野正明氏、住石扶桑工業（株）の全面的な御協力と御支援があったことを記し、感謝の意を表する次第である。

凡　　例

- 1 第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「札幌」「札幌北部」を利用した。
- 2 図版1の空中写真は、札幌市企画調整局の原版を利用した。

目 次

第1章 調査までの経過と遺跡の位置	7
第2章 調査の方法と層序	11
第3章 遺構および遺物	15
第1節 竪穴住居址	15
第2節 焼土	32
第3節 発掘区出土遺物	33
結語	35

挿図目次

第1図 K36遺跡付近地形図（1：25,000）	6
第2図 K36遺跡付近地形図（1：2,000）	9
第3図 K36遺跡発掘区配置図および遺構関連図	12
第4図 K36遺跡発掘区セクション図	13
第5図 K36遺跡第1号竪穴住居址	16
第6図 K36遺跡第1号竪穴住居址かまどおよび出土遺物	17
第7図 K36遺跡第2号竪穴住居址	18
第8図 K36遺跡第2号竪穴住居址かまどおよび出土遺物	20
第9図 K36遺跡出土土器（1～3：第2号、4：第3号、5：発掘区）	21
第10図 K36遺跡第3号竪穴住居址	22
第11図 K36遺跡第3号竪穴住居址かまどおよび出土遺物	24
第12図 K36遺跡第4号竪穴住居址	25
第13図 K36遺跡第4号竪穴住居址かまどおよび出土遺物	26
第14図 K36遺跡第5号竪穴住居址（1）	28
第15図 K36遺跡第5号竪穴住居址（2）	29
第16図 K36遺跡第5号竪穴住居址（3）（微細図）	30
第17図 K36遺跡第5号竪穴住居址かまどおよび出土遺物	30
第18図 K36遺跡焼土1、2	32
第19図 K36遺跡発掘区出土土器	33
第20図 K36遺跡遺構・発掘区出土石器	34

図版目次

図版 1	K 36遺跡付近空中写真（昭和56年撮影）	37
図版 2 A	K 36遺跡発掘区近景（1）（北東より）	38
2 B	K 36遺跡発掘区近景（2）（沢跡：南東より）	38
図版 3 A	第1号竪穴住居址（西より）	39
3 B	第1号竪穴住居址かまど（西より）	39
図版 4 A	第2号竪穴住居址（西より）	40
4 B	第2号竪穴住居址かまど（西より）	40
図版 5 A	第2号竪穴住居址（確認面：北より）	41
5 B	第3号竪穴住居址（確認面：北より）	41
図版 6 A	第3号竪穴住居址（北より）	42
6 B	第3号竪穴住居址かまど（北より）	42
図版 7 A	第4号竪穴住居址（北西より）	43
7 B	第5号竪穴住居址（1）（北東より）	43
図版 8 A	第5号竪穴住居址炭化した茅出土状況（E/F - 5 / 6 区）	44
8 B	第5号竪穴住居址炭化材出土状況（B/C - 1 / 2 区）	44
8 C	第5号竪穴住居址炭化材出土状況（F - 4 区）	44
8 D	第5号竪穴住居址炭化材・礫出土状況（B,C,D - 6 区）	44
図版 9 A	第5号竪穴住居址炭化材出土状況（D,E,F - 1 / 2 区）	45
9 B	第5号竪穴住居址炭化材出土状況（D - 2 区）	45
9 C	第5号竪穴住居址炭化材出土状況（F - 4 区）	45
9 D	第5号竪穴住居址炭化材出土状況（B/C - 2 区）	45
図版10A	第5号竪穴住居址（2）（南西より）	46
10B	第5号竪穴住居址かまど（南西より）	46
図版11A	第5号竪穴住居址（確認面：北東より）	47
11B	竪穴住居址・発掘区出土石器（縮尺1：2）	47
図版12	竪穴住居址・発掘区出土土器（1）（縮尺1：3）	48
図版13	竪穴住居址・発掘区出土土器（2）（縮尺1：3）	49



第1図 K36遺跡付近地形図（1:25,000）

第1章 調査までの経過と遺跡の位置（第1、2図）

札幌市教育委員会は、昭和29年刊行の『札幌沿革史』の記事、高畠宜一が昭和20年代後半に作成した「旧琴似川流域の竪穴住居址分布図」等から、旧琴似川沿いの地域に擦文時代の竪穴住居址群が密集し、市内でも最も有数な包蔵地区であることを知ることができた。そのため、この地区においては重点的に道路改修、水道管・電信線埋設等の各種工事の立会調査および再開発地区を含めて試掘確認調査・発掘調査を実施してきた。その結果、旧河道の両岸約200m幅の範囲に、本市埋蔵文化財台帳に登載されている包蔵地以外にも包含層が広がっていることが判明してきた。そこで、昭和59年4月に出版した『札幌市文化財調査報告書』Ⅱ（四訂版）の台帳及び分布図では、これらの地区についても周知の包蔵地と同等の取り扱いを行なうことになった。

昭和61年5月9日の昭和61年第2回宅地指導委員会において、日本マクドナルド・熊野豊士両名申請で、北区北23条西14丁目で店舗を造成（約3,600m²）するための開発計画事前審査が付議された。本地区は、前述した旧琴似川の両岸200m以内の地域に該当するところから、埋蔵文化財の取り扱いについて協議をうけ、早々現地確認調査を実施した。その結果、遺物が表面採集できることと旧地形がほぼそのまま残っていることから、5月12日提出された試掘依頼書に基づき、5月16、17日の両日に試掘調査を実施した。

手掘りによる試掘確認調査が実施できたのはかつて畠地であった北東側の約2,000m²の範囲で、その中央付近から竪穴住居址と考えられる四角形の黒色土の落ち込みが4ヶ所確認され、この部分の周囲を含めて約2,300m²は本調査が必要と判断された。残りの約960m²については、遺構の分布が薄く、建物が立ちすでに破壊されている部分が多いと考えられたため工事に合わせて立会調査することとした。

この結果をもって、5月20日に再度協議を行なったが、本工事の主体を占める日本マクドナルドは、地主である熊野氏との土地の売買契約は仮契約の段階であり、また熊野氏の店舗についても建築関係者と既に契約済みで、早期に工事着手を迫られていることなどの問題が、申請者から提示された。結局、以上の事情で、今回の発掘調査については現在の土地所有者である熊野豊士氏が措置することとなった。そのため、急拵日程を調整し、実質的には昭和61年5月28日から、重機による排土、測量作業を開始し、6月2日から6月20日まで現場の作業を実施した。

ところで、本市埋蔵文化財台帳では、本地区の道路をはさんだ北側にK36遺跡、その南側にK120遺跡が登載されている。両遺跡は、前述した明治年間に作られた分布図とともに『琴似町史』、『郷土の科学』41/42等にも記録があるが、分布調査時点では現地確認ができず、その正確な範囲については明らかにできなかったものである。そのため、本地区については、台帳に従えば新規の遺跡として取り扱うべきところであるが、上述の理由から隣接するK36遺跡の一部と理解することとした。

第1図に示したように旧琴似川は、武蔵女子短大の敷地周辺で大きく蛇行し、その後流れを北西に向け、現在の北大職員官舎の部分をへて、さらに今度は北東に流れを変えている。すなわち、本遺跡の発掘区の北東側に北西に流れる河川があったことになる。今回みつかった竪穴住居址群は、この川から50~70m程の極めて近接した位置に立地しているといえる。

なお、発掘調査の期間はもとより、報告書出版にいたるまで、熊野豊士氏一家をはじめ住石扶桑工業（株）の方々からは全面的な御協力と御理解を得て、作業を円滑に進めることができた。ここに深く感謝の意を申し上げる次第である。

（上野 秀一）



第2図 K 36遺跡付近地形図 (1 : 2,000)

第2章 調査の方法と層序（第3、4図）

発掘調査は、試掘調査の結果に基づき敷地の北東側2,300m²を調査対象地区に定め、南東側の北東－南西方向にある敷地境界を基線にして、10×10mの大グリッド方式で調査を進めた。呼称は、北東－南西方向が算用数字、それに直交する軸はアルファベットである。

表土は、長らく耕作を行なっていたことと、表面採集の結果遺物の包含量が少ないと判断されたため、遺構確認面まで Yunpo によって排土した。その結果、合計5基の竪穴住居址と焼土2基、それに沢状の旧地形が確認されている（第3図）。

なお、発掘区の南西部では深い層準の遺構と包含層の確認のために深さ1mのトレンチをいたが、何ら発見することはできなかった。

ところで、本遺跡では3本のセクション（第4図）をとっている。A-Bセクションは、B-4～7区北西壁の部分、C-DセクションはA-4、5区の北西側、E-FセクションはD-2区の沢状地形の北西部のものである。E-Fセクションを除いては、耕作土除去後のものである。層名を示せば以下の通りである。

I a層：暗茶褐色土層（クラック入る）。

I b層：暗（黄）灰褐色シルト質土層（堅くしまる）。

I c層：黄褐色シルト質土層（堅くしまる）。

II a層：暗黄褐色シルト層（腐植土を含む泥炭層）。

II b層：暗褐色シルト質土層（中に大粒の炭粒入る）。

II c層：黒褐色～暗茶褐色シルト層（泥炭層）。

III a層：（暗）灰褐色シルト層（堅くしまる）。

III b層：（白）灰褐色シルト質土層（砂質的）。

IV a層：灰褐色～明褐色砂層（縞状に入る。中粒）。

IV b層：灰褐色シルト質土層（砂を多く含む）。

IV c層：暗灰褐色砂層（中粒）。

V a層：灰褐色シルト層（粘性強い）。

V b層：灰褐色シルト質土層（ボソボソし、砂質的）。

VI a層：暗黄褐色砂質土層。

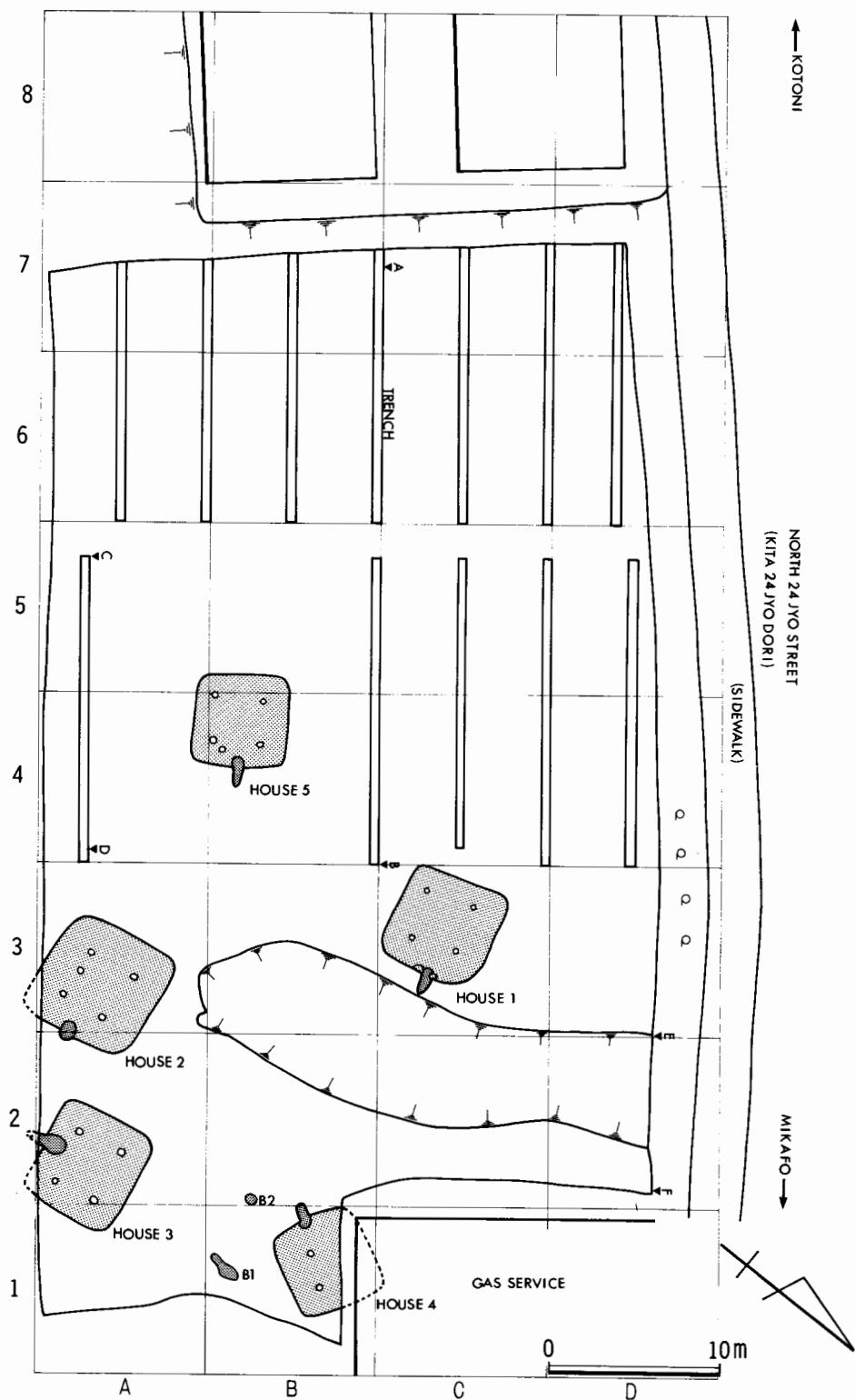
VI b層：灰褐色シルト質土層（やや砂質的）。

VI c層：（白）灰褐色シルト層（粘性強い）。

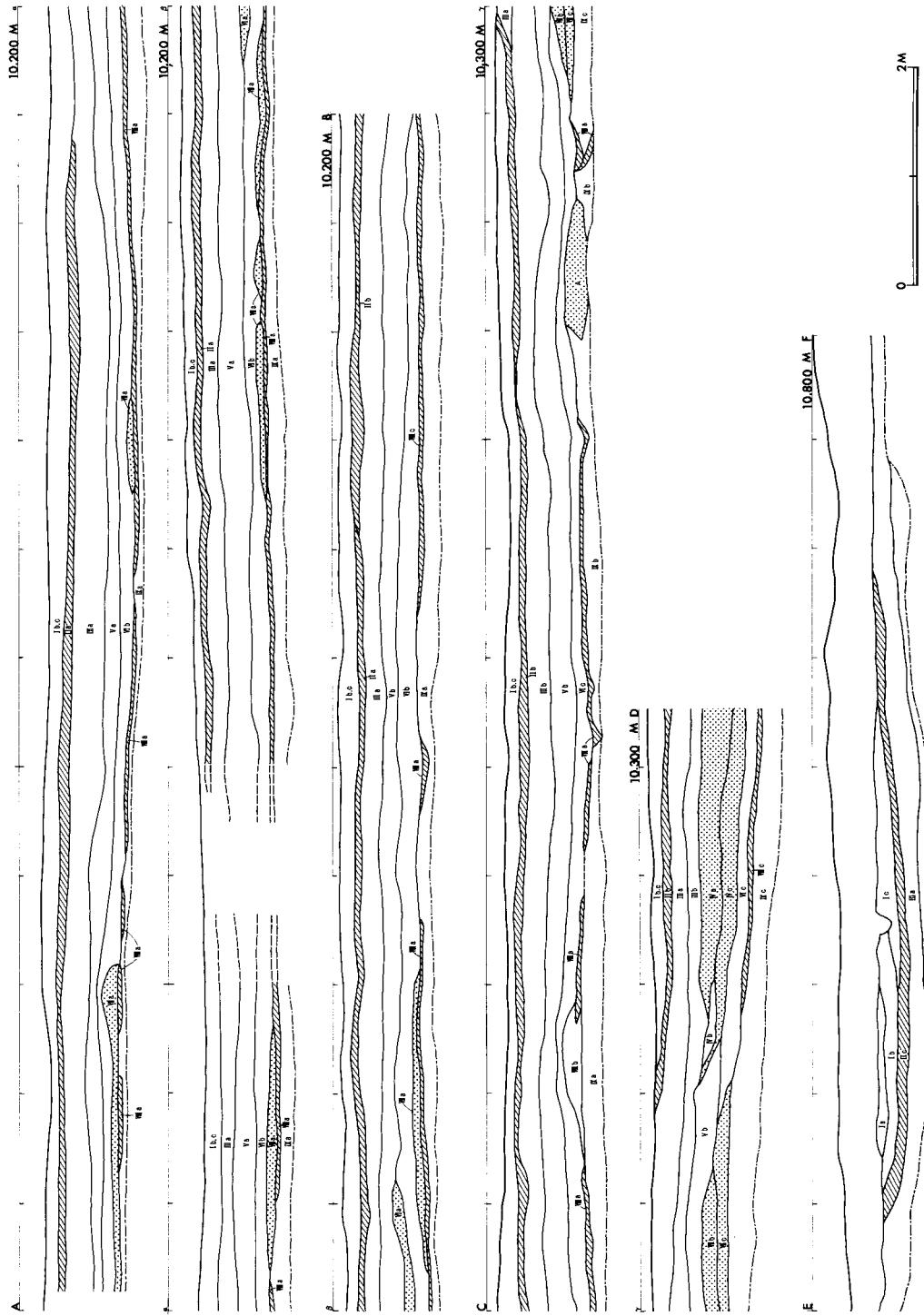
VII a層：明褐色砂質土層（やや粘性あり、リモナイト多い）。

VII b層：明褐色砂層（中粒）。

VII c層：（暗）褐色砂層（粗粒）。



第3図 K 36遺跡発掘区配置図および遺構関連図



第4図 K36選跡発掘区セクション図

VII a層：暗褐色シルト層（腐植土を含む泥炭層）。

VII b層：（白）灰褐色シルト層（粘性強い）。

VII c層：暗茶褐色～暗灰褐色土層（泥炭層）。

IX a層：明灰褐色シルト層（やや堅くしまる）。

IX b層：灰褐色シルト層（粘性強い）。

IX c層：黄褐色シルト質土層（かなりの砂を含む）。

A層：褐色砂質土層（やや粘性がある）。

この中で、II a～c層、VII a～c層は泥炭層ないし腐植土を含む泥炭質土層であるが、II a～c層の例はあまり明確でない。IV a～c、VI a、b、VII a～c層は砂質土層ないし砂層で、IV a～c層はC-Dセクションの北東部にのみ認められる。VI a、bないしVII a～c層は、VII a～c層の泥炭層の上に堆積しているものである。VII a～c層の泥炭層は、小山内ら（小山内・杉本・北川1958）の北24条西6丁目付近の断面図の「木炭泥炭」に対応するもので、またK460遺跡（上野編1980）の第7層、K466遺跡（上野1979）の第5層にも対比されると思われる。

なお、竪穴住居址の掘り込み面はI a～c層ないしその上に堆積する旧表土層中である。

（上野 秀一）

[引用文献]

上野秀一 1979『K466遺跡』 札幌市文化財調査報告書XX

上野秀一編 1980『K460遺跡』 札幌市文化財調査報告書XXII

小山内熙・杉本良也・北川芳男 1958『5万分の1地質図説明書——札幌』

第3章 遺構および遺物

本遺跡からは5軒の竪穴住居址と2基の焼土がみつかっている。竪穴住居址は、北西方向に向く沢状の旧地形を取り囲むように分布している。焼土は、第3号と第4号竪穴住居址の間から検出されている（第3図）。

第1節 竪穴住居址

第1号竪穴住居址（第5、6図、図版3A、B）

C-3区にあって、表土除去後にI層とした黒色土が方形をなしていたものである。

平面形は、隅丸不整方形を呈し、規模は6.00×5.85m、壁高は40cm程ある。主軸はN77°Eで、かまどは東壁の中央より50cm程北に偏在して設置されている。発掘当初は、かまどの位置が不明であり、東壁と床面の一部をトレンチで確認した。

柱穴は、四隅から各1個づつみつかっているが、柱穴部分は床面より軟らかで検出は容易であった。SP1は、直径30cmの円形、SP2は30×25cmの楕円形、SP3、4は直径25cmの円形を呈し、深さは38cm（SP1）、36cm（SP2、3）、34cm（SP4）である。

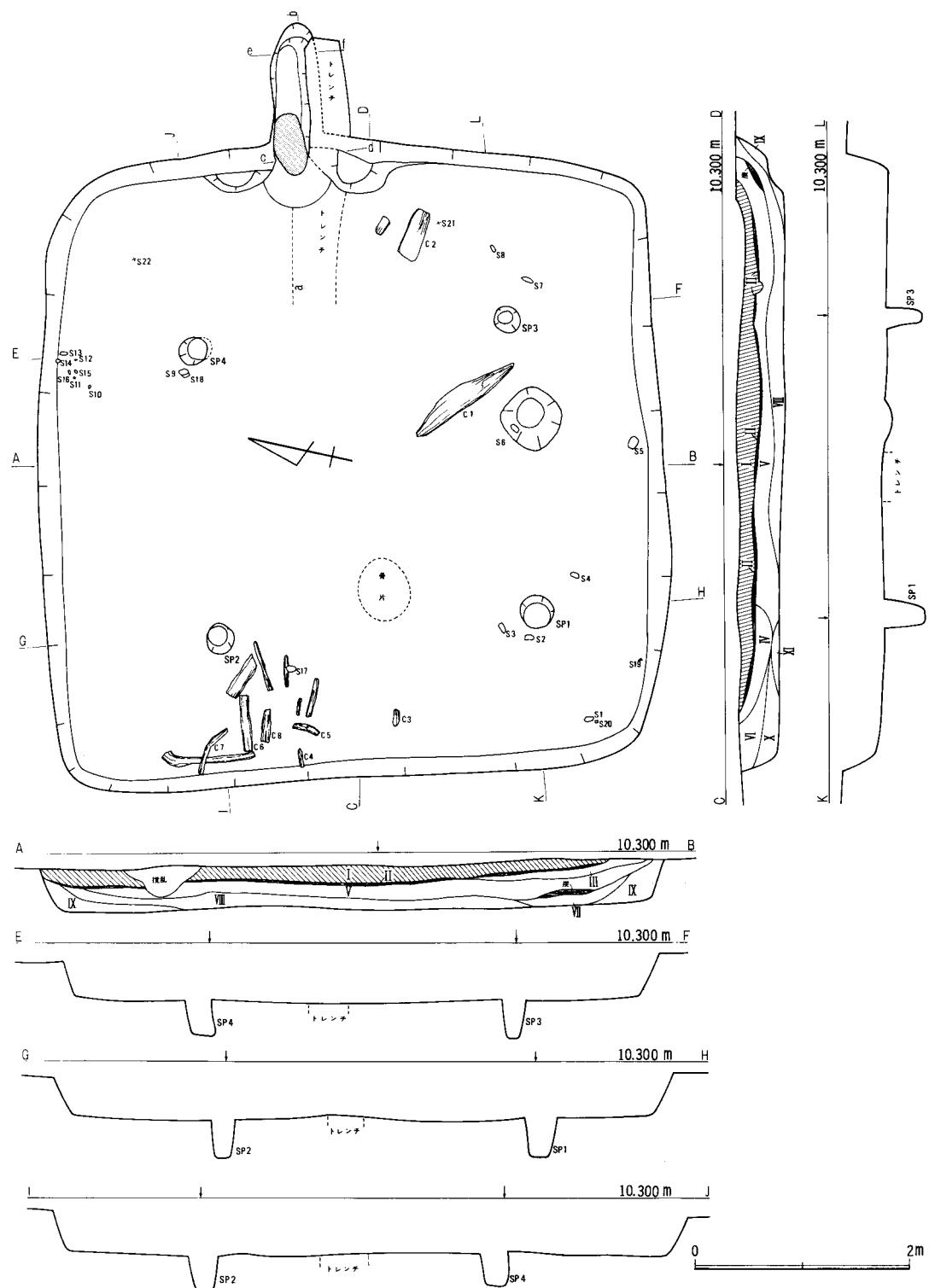
SP1とSP3の間のSP3より、径52cm、深さ10cm程の隅丸方形を呈する皿状の浅いくぼみがある。

層は、I層：黒色土層（粒状を呈し粘性はない、炭粒を含む）、II層：炭層、III層：暗黄色粘質土層（黒色土に黄色土が混ざる）、IV層：暗黄色粘質土層（炭粒を多く含み堅い）、V層：暗黄褐色粘質土層（炭粒を含む）、VI層：暗灰褐色粘質土層、VII層：灰褐色粘土層（炭粒を多く含む）、VIII層：灰褐色粘土層（炭化木片を含む）、IX層：明灰褐色粘質土層、X層：焼土まじりの暗褐色土層、XI層：焼土層。

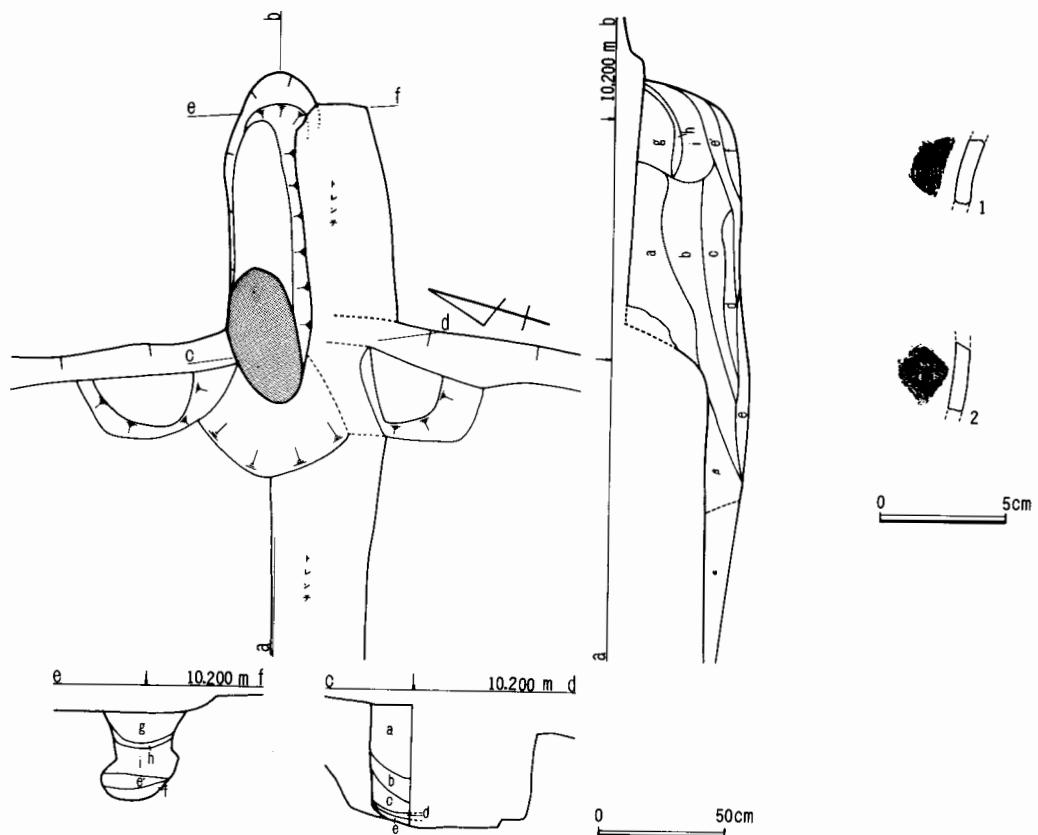
II層とした炭層面が本来のくぼんだ地面であり、I層は後で埋まったものと考えられる。当時の生活面は、VIII層上面より掘り方にかけての層中にて営まれたもので、VIII層上面には炭化した材（屋根材の一部か）がみられ、西壁付近には炭化材（C3～8）が散乱していた。さらに、西壁付近の床面上には焼土（XI層）がある。

かまどの火床の規模は、55×28cmで楕円形を呈し、火床の左右には奥行き25～30cm、幅60～70cm、高さ15cm程の袖と考えられる舌状の高まりが壁に接してある。煙道は、住居址の主軸と一致し、長さ1.1m、幅40cm、深さ40cm程の大きさで、火床近くは深くなっている。

かまどの層は、a層：暗灰褐色土層、b層：（白）灰褐色シルト質土層、c層：（暗）灰褐色シルト質土層（焼けややおよぶ）、d層：明褐色土層（焼けている）、e層：暗褐色焼土層（上部に骨・炭を主体とする灰層がある）、e'層：暗褐色土層（煤けている）、f層：黒褐色土層（煤の層）、g層：明灰褐色粘質土層、h層：暗灰褐色土層、i層：暗褐色土層で、本竪穴住居址の覆土に関連す



第5図 K 36遺跡第1号竪穴住居址



第6図 K36遺跡第1号竪穴住居址かまどおよび出土遺物

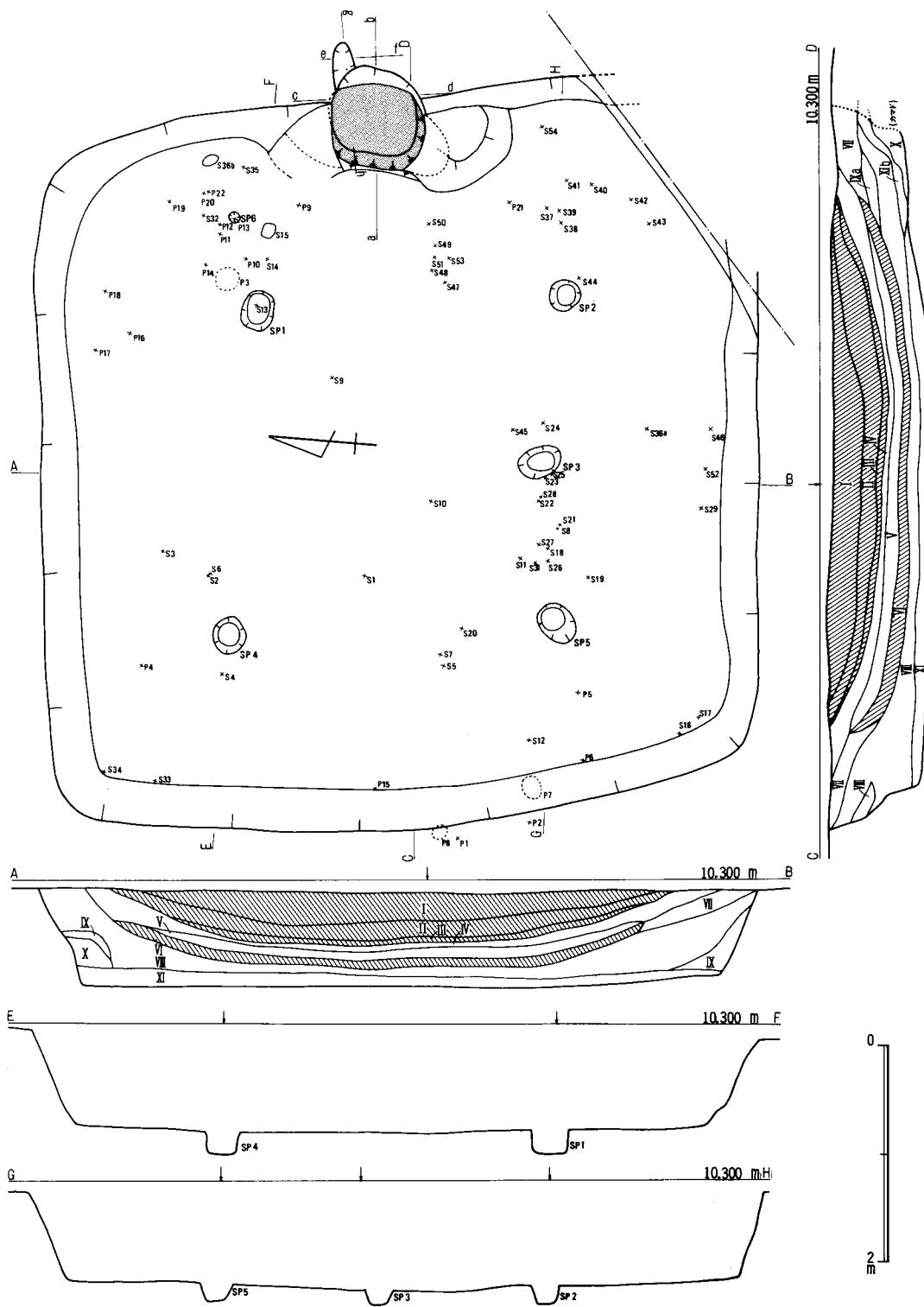
る層は α 層：黒褐色土層（黒色土粒を多く含む）、 β 層：暗灰褐色土層である。

遺物については、礫が北壁に接して5点、SP 4付近に2点、SP 1および南西コーナー部に6点、SP 3付近に3点と総計23点検出された。礫の大きさは、長さ5.4~12.3cm（平均7.22cm）、幅2.2~7.3cm（平均3.44cm）、厚さ1.6~3.4cm（平均2.36cm）、重量60~137g（平均94g）の棒状を呈する礫である。さらに、黒耀石の剝片が北壁の礫群中および南西側コーナー部から3点検出され、内2点は石器であった。

なお、床面中央より西に1m程偏在した部分（60×50cmの範囲）に焼けた骨片が集中している状態が認められた。
（羽賀 憲二）

遺 物（第6図1、2、第20図1、2、図版11B、13）

第6図1、2は、覆土から検出された甕の胴部の小片で、表面に刷毛目痕、裏面に籠磨き痕がある。第20図1、2は、共に床面直上から出土したもので、黒耀石のやや厚手の剝片を利用した石器である。1は、下半を欠損するが、裏面の一部に調整剝離がある削器（？）、2は表面の上下端は不規則な剝離があるので搔器的に使われたものであろうか。
（上野 秀一）



第7図 K 36遺跡第2号竪穴住居址

第2号竪穴住居址（第7、8図、図版4 A、B、5 A）

本号は、A-2/3区から検出されたもので、今回みつかった中では最も規模の大きい例である。確認面での平面形は不整四角（正方）形で、長軸は東西方向、大きさは6.76×6.62mである。南東隅は、敷地外のため発掘できなかった。深さは、当時の生活面までは85cm（標高9.4m）、掘り方までは95cmある。

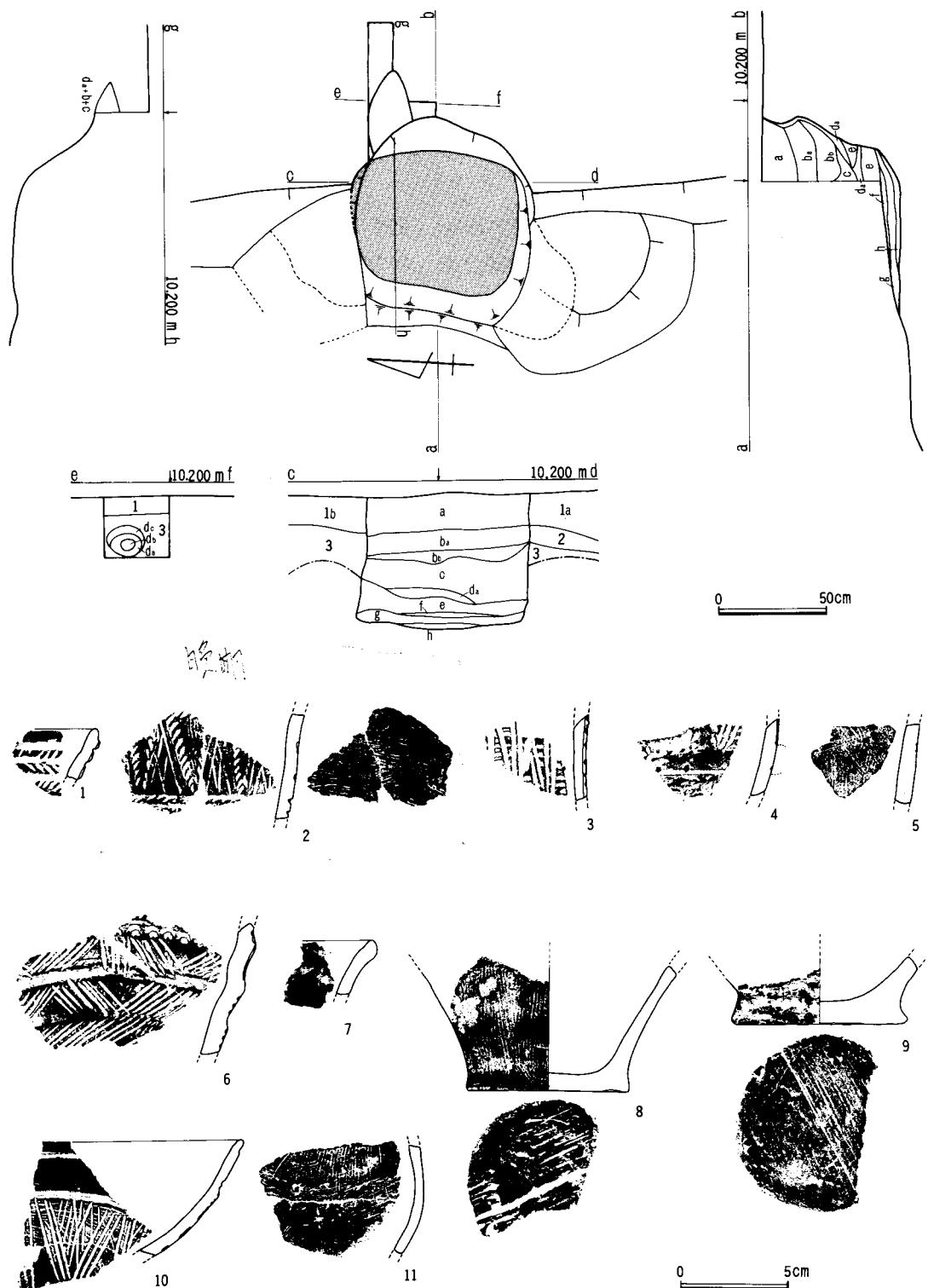
層は、I層：（淡）黒褐色土層（耕作土の流れ込み）、II層：黒褐色土層（ボソボソ）、III層：黒色土層（Ta-aの火山灰粒入る）、IV層：茶褐色土層（やや粘性があり、シルト質）、V層：（黄）白色シルト層、VI層：黒色土層、VII層：黄褐色シルト層（やや砂質的）、VIII層：暗黄褐色シルト質土層（地山のB層が混入した土層）、IX層：VII層と同じ、X層：明褐色粗粒砂層（一部黄褐色土層で、共に炭および暗黄褐色土粒を含む）である。

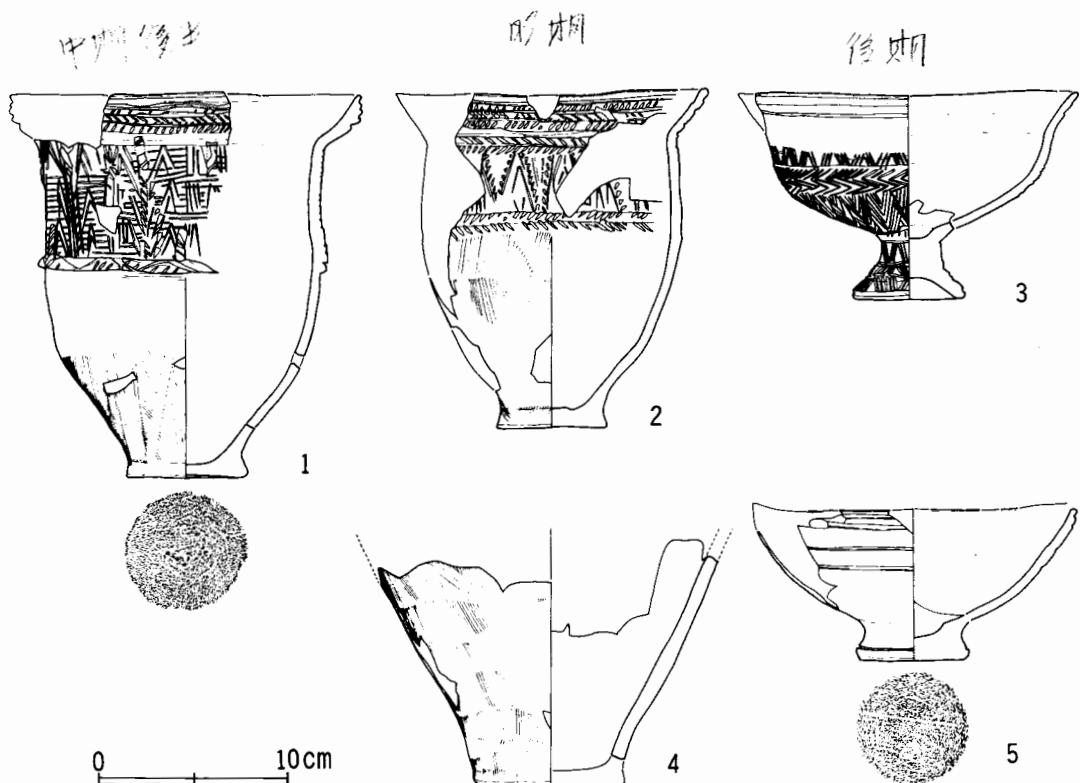
すなわち、I～IV層までは、黒色系統の土層で、上部に堆積し、その下にV層の白色のシルト層を挟んでまたVI層の黒色土層の堆積がみられる。生活面はVII層下面で、X層は掘り方を二次的に埋めた土層であると考えられる。

柱穴は、5本確認されているが、内SP1、2、4、5は四隅にあり、SP3はSP2と5の間からみつかっている。大きさおよび深さは、SP1が30×37cm、深さ33cm、SP2は29×29cm、深さ33cm、SP3は29×40cm、深さ25cm、SP4は30×34cm、深さ33cm、SP5は30×39cm、深さ26cmである（深さは生活面からの深度）。おおむね短径約30cm、深さ30cm前後の大きく浅い例である。かまどは、東壁からみつかっている。火床の大きさは68×79cmで、1/3程が壁の外にでている。袖は両側に盛土して作ったものがあったと思われるが左側は明確に確認できなかった。煙道としては、e-fセクションに示したような穴がみつかっているが、途中までしか掘られておらず貫通していない。従って、本来の煙道は、a-bセクションで判断されるように火床面の外（東）側の壁の一部をそのまま利用した可能性が高い。d、e層はこれらの煙道相当部分の堆積層と考えられる。f、h層は、火床本体の堆積層である。

層は、a層：暗灰褐色土層（微粒の炭入る）、ba層：灰褐色と暗灰褐色土層との混合層（大粒の炭を含む）、bb層：暗灰褐色土層（炭はあまりなし）、c層：灰褐色シルト質土層、da層：明茶褐色土層（やや赤みがあり、焼けた状態の層）、db層：白灰褐色シルト質土層、dc層：灰褐色シルト層（e層に近く、若干焼土が入る）、e層：灰褐色シルト質土層（下部は加熱で焼けている）、f層：明茶褐色土層（大量の炭を含む）、g層：暗灰褐色土層、h層：赤褐色～明茶褐色焼土層で、地山の層は1a層：（暗）灰褐色シルト質土層、1b層：暗灰褐色土層（1a層に近いが、やや堅くなる）、2層：暗灰褐色土層（顆粒状に暗灰褐色土と若干の炭と灰褐色質土粒を含む）、3層：（暗）灰褐色シルト質土層で、1a、b層は発掘区のIa～c層、2はIIa～c層、3はIIIa、b層に対応する。

遺物の出土状況については、P1、2、7、8（第8図2、6、第9図1、2）については、遺構確認面の基本層位のIb・c層および遺構覆土上部から検出されたもので、本遺構に伴うもの





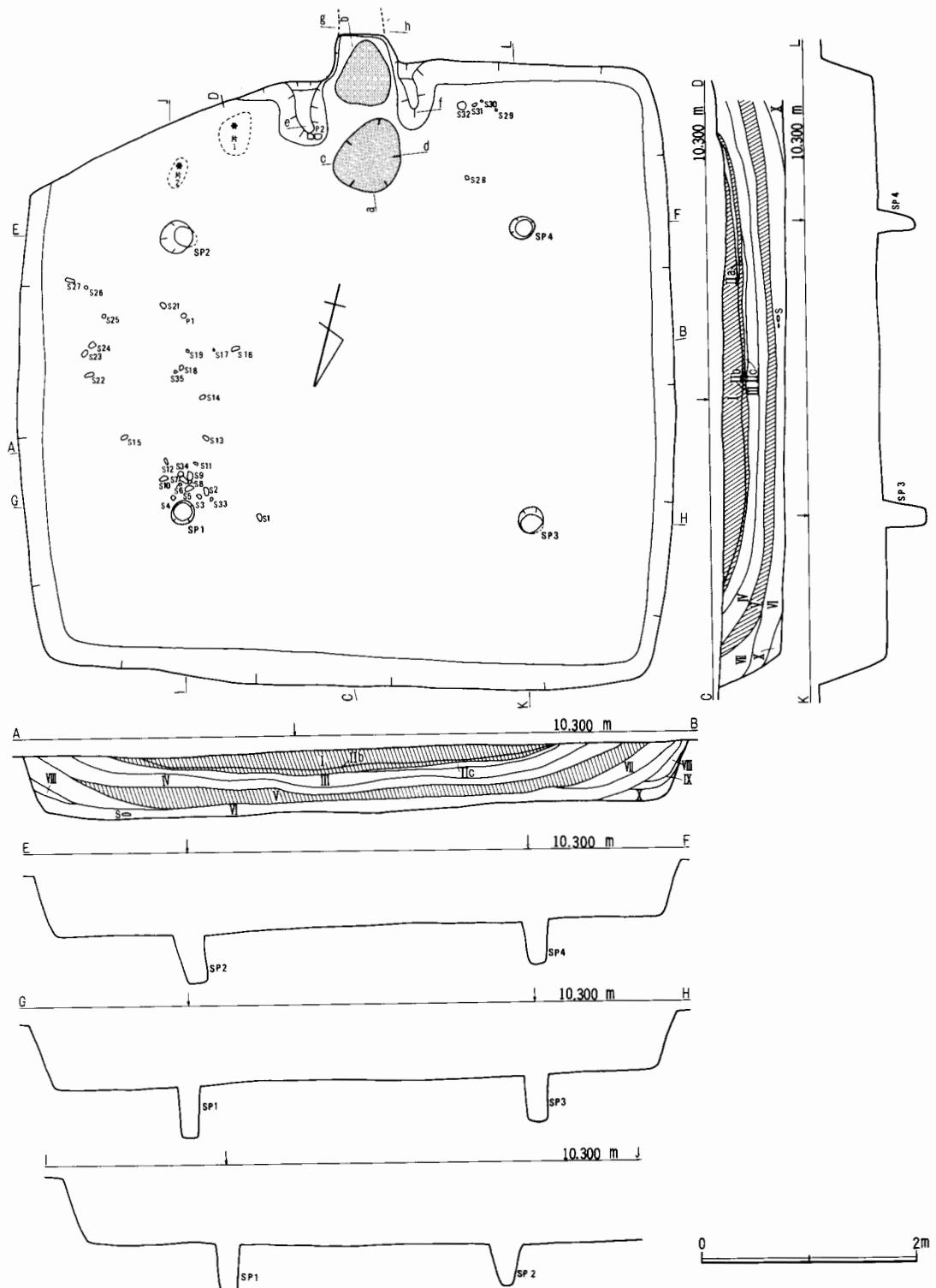
第9図 K36遺跡出土土器（1～3：第2号、4：第3号、5：発掘区）

かどうかは明確でない。それ以外の資料は床面ないし床面直上を中心に出土したものである。土器については、かまどの左側の北東隅に集中して出土しており、その内P3の高壺形土器（第9図3）と、P10、13の甕の破片（第8図9、3）を図示した。あとは南東、北東、南西隅から第8図5、10、11、4（各々P21、4、5、6）が数点づつ出土しているのみである。剝片類は、北東隅（S15、36a）、南壁付近（S52）からみつかっている。礫は、SP5とSP3の間（12個）と南東隅（9個）からまとまって出土した。礫の総数は110点（内番号を付けたもの52点）で完存例でみると長さ5.2～16.7cm（平均7.36cm）、幅2.0～7.9cm（平均4.13cm）、厚さ1.3～4.7cm（平均2.49cm）、重量40～500g（平均117.9g）の棒状礫である。
(上野秀一)

遺物（第8図1～11、第9図1～3、第20図3、4、図版11B～13）

第9図1、2は、甕形土器。1は推定口径18.6cm、底径6.5cm、高さ20.8cmの大きさで、口縁部文様帶の下縁には貼付文が1本横に巡る。口唇部付近は大きく外彎し肥厚帶を形成し、多段状に文様がある。その下には、横走沈線文と振幅の狭い鋸歯状の沈線文が密に施されている。なお、垂下する短い貼付文が上下から互い違いに施文されている。裏面は、最終整形は箆磨きで黒色処理が施されている。2は、推定口径16.5cm、底径5.8cm、高さ17.7cmのもので、口唇部付近はやはり大きく外彎し、沈線文と刻目文からなる文様がある。その下は、文様帶の上下に「く」の字状の刺突文列があり、その間に縦方向に鋸歯状の沈線文と刺突文がある。裏面整形は1と同じ。

同図3は、高壺形の土器である。推定口径18cm、底径5.9cm、高さ10.9cmの規格で、裏面は不十



第10図 K 36遺跡第3号竪穴住居址

分ながら黒色処理が施されている。環部は、中央よりやや上に浅い段を有し、段から上はややきつく立上がる。口唇部直下には浅い沈線文を2条巡らし、段の上に1段とその下部は縦方向と横方向の振幅の狭い鋸歯状の沈線文が密に施されている。脚部は上下に横走する沈線文を巡らし、その間に縦方向の鋸歯状文、台部は上下と中央に段状に沈線文を入れその間にやはり縦方向の鋸歯状文が入るものである。

第8図1～9は、第9図1、2と同種の甕形土器の破片、同図10、11は環の破片である。この中で裏面に黒色処理があるのは、6と8である。

第20図3、4は、共に黒耀石製の剝片を利用したピエス・エスキューである。（上野秀一）

第3号竪穴住居址（第10、11図、図版5B～6B）

A-1／2区で検出されたもので、南東隅と煙道の先端は敷地外のため未発掘である。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は6.1×5.9m、壁高は55～60cmを数える。主軸はN15°Wで、かまどは南壁中央に設置している。

柱穴は四隅に各1個づつ4個検出されており、SP1は直径22cm、深さ48cm、SP2は直径30cm、深さ40cm、SP3は25×23cm、深さ45cm、SP4は23×20cm、深さ40cmで、平面形はすべて円形である。

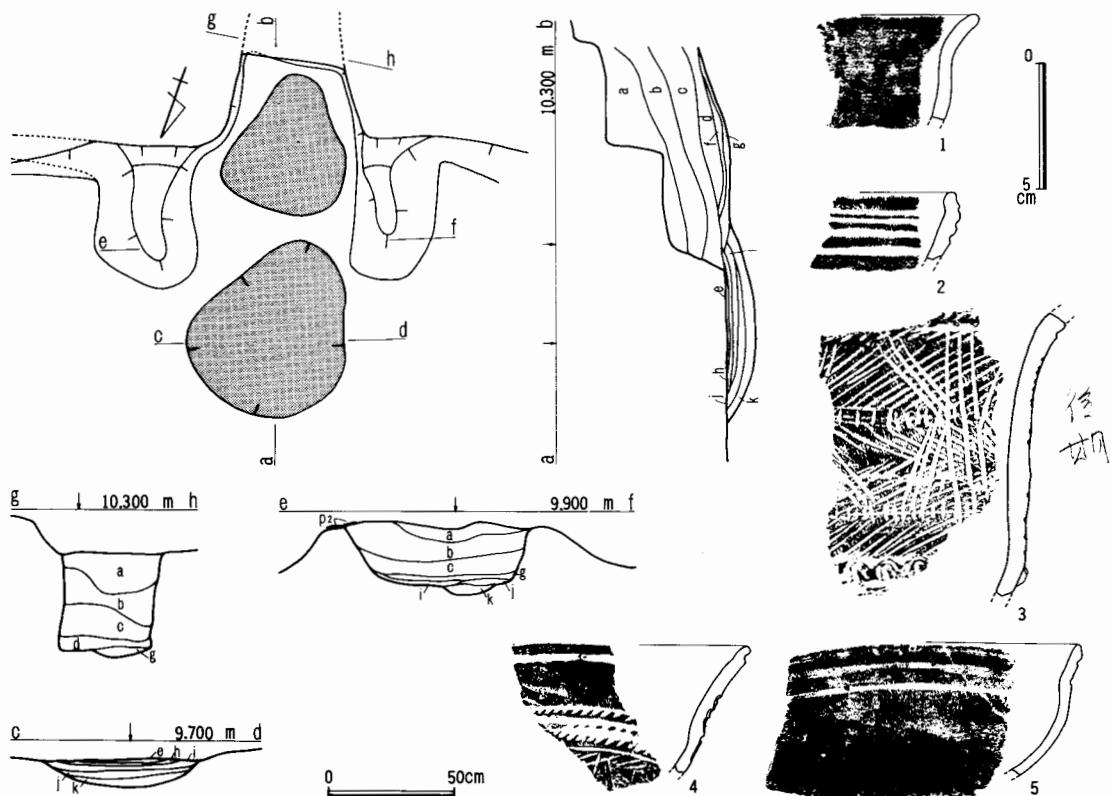
層は、I層：黒色土層、IIa層：灰色火山灰まじりの黒色土層、IIb層：灰色火山灰層、IIc層：灰色火山灰層（粒子が粗い）、III層：暗褐色粘質土層、IV層：灰褐色粘質土層、V層：極黒色粘質土層、VI層：灰褐色粘質土層（炭粒を含む）、VII層：黄褐色粘質土層（汚れ多い）、VIII層：黄褐色粘質土層、IX層：褐色粘質土層（炭粒多く含む）、X層：黄褐色粘質土層で、II層上面が本来のくぼんだ地表である。III、IV層をはさんで、上部にIIa、b層、下部にV層の黒色を呈する粘質土の堆積がみられる。生活面はVII層上面より掘り方までの層中に営まれたと考えられる。

かまどは南壁にあり、焼土は手前と奥の2ヶ所にある。前者は72×63cm、後者は55×48cmの範囲で地表が焼けている。煙道は主軸と同一方向で掘られ、壁と接する部分では幅70cm、深さ60cmを数える。焼土の左右には長さ50cm、幅30～40cm、高さ20cm程の舌状に張り出す袖と考えられる高まりが壁に接してある。

かまどの層は、a層：灰褐色粘質土層、b層：褐色粘質土層（炭粒・泥炭まじる）、c層：灰褐色粘質土層、d層：褐色粘質土層、e層：炭層、f層：灰層（骨片多くまじる）、g層：焼土層、h層：灰層（骨片多くまじる）、i層：焼土層、j層：灰層（骨片多くまじる）、k層：焼土層である。

手前の焼土では、間に灰層をはさんで2枚重なっており、また奥の焼土が手前の焼土を切っていることから、都合3回にわたって用いられた例ということができる。両側の袖は、最も新しい奥にある焼土に伴うものと考えられる。

遺物は、SP2付近に紡錘車が1点（P1）、右側かまど袖上に土器の底部（P2）が押しつぶされた状態であった他は、SP1、2間の部分（東壁付近）とかまど左側袖付近に礫が35個分布し、



第11図 K36遺跡第3号竪穴住居址かまとおよび出土遺物

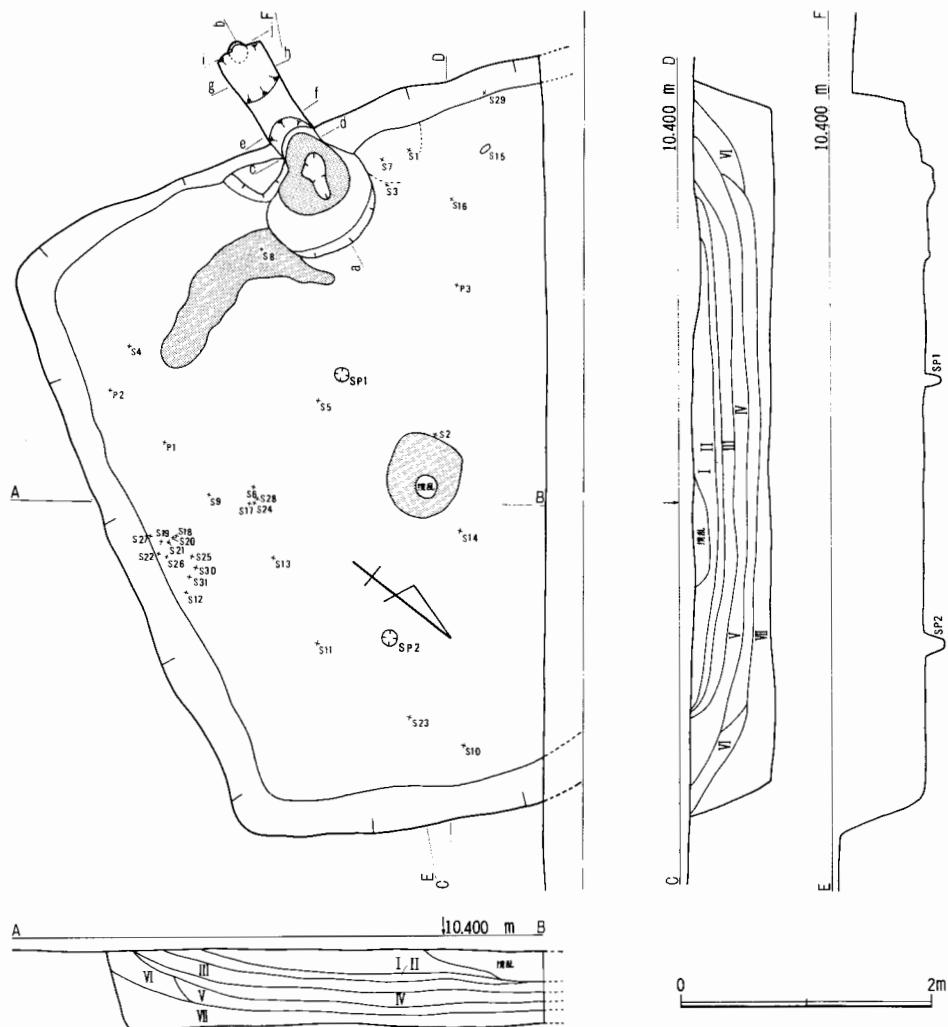
また床面上から覆土層中に25個あって、総数60個の礫が検出された。完形例でみると、長さ5.2~11.4cm（平均6.73cm）、幅2.7~8.7cm（平均4.13cm）、厚さ1.4~5.5cm（平均2.54cm）、重量40~760g（平均112.9g）の棒状礫である。

また、かまと東側袖には、焼けた骨片が2ヶ所集中した部分があった。その範囲は、30×40cm（骨片1）と15×30cm（骨片2）である。
 （羽賀 憲二）

遺 物（第9図4、第11図1~5、第20図11、図版11B~13）

第11図1~3は甕形、4、5は壺形土器の破片である。1は、口唇部付近で大きく外彎するもの、2は内彎気味に横走沈線文が入るものである。3は、口唇部を欠損するが厚手の土器片で、文様帶の下縁には圧痕文がついた貼付文が巡る。その上には、斜めないし横方向に鋸歯状に展開する沈線文が密にあり、さらに縦と大きい振幅の鋸歯状沈線文が一部に認められる。第9図4は甕形土器の底部片である。4は、口唇部直下に沈線文があり、その下には刺突文と沈線文からなる文様がある。5は、口唇部直下に浅い2条の沈線文が横に巡り、その下は強くはらむ器形の例である。以上の資料の内、1を除いて内黒処理が認められる。

第20図11は、土製紡錘車である。灰褐色の色調を呈する平板状の例で、特に文様はない。大きさは5.5×5.6cm、厚さ1.3cmで、重量は41.6gである。
 （上野 秀一）



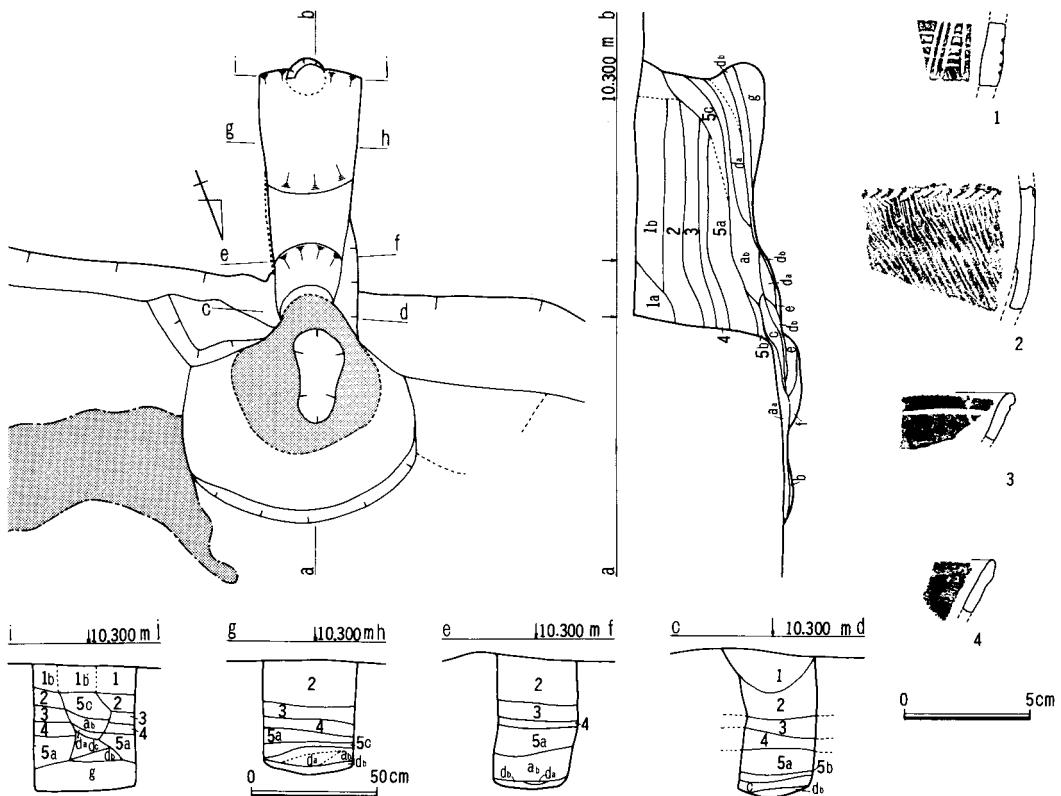
第12図 K 36遺跡第4号竪穴住居址

第4号竪穴住居址（第12、13図、図版7 A）

本号は、B-1区で黒色土層の落ち込みから存在がわかったものであるが、北西側の1／3程はすでにガソリン・スタンドを建てた時に破壊されている。確認面での北東—南西方向の長さは5.7m、深さは63cmである。

層の堆積は、I層：黒色土層、II層：黒色土層（火山灰を含む）、III層：暗茶褐色土層、IV層：灰褐色シルト質土層、V層：黒色土層（色調は真黒）、VI層：暗褐色土層、VII層：暗灰褐色シルト質土層（やや砂質的）である。すなわち、上部にI～III層の黒色系統の土層が堆積し、その下はV層の黒色土層をはさんで灰褐色系統の土層がある。

柱穴は、2本しかみつかっていないが、SP 1は11×12cm、深さ13cm、SP 2は13×13cm、深さ



第13図 K36遺跡第4号竪穴住居址かまどおよび出土遺物

16cmの例で、SP 1は通常配置される場所から若干ずれている。

かまどは南西壁にあり、焼土（59×64cm）が遺構の中央付近に認められた。

かまど関係の堆積層は、aa層：明茶褐色土層（茶褐色土・焼土・灰褐色シルト等の土粒を含む）、ab層：暗茶褐色土層（すすけた層）、b層：暗灰褐色土層（灰褐色砂質シルト層中に若干の炭・骨と多めの焼土粒入る）、c層：灰褐色砂質シルト層、da層：灰褐色土層（若干の焼土粒ほかを含む）、db層：暗灰褐色土層（全体に焼土粒・茶褐色土粒少ない）、e層：暗灰褐色灰層（多量の骨と若干の炭含む）、f層：赤褐色砂層（焼けた砂層）、g層：灰褐色シルト質土層（しまっておらず、大粒の暗茶褐色土粒若干含む）。なお、かまどの堆積層の上部の層は、1a層：暗茶褐色土層、1b層：白灰褐色シルト質土層、2層：灰褐色シルト質土層、3層：暗灰褐色シルト質土層（泥炭層？）、4層：灰褐色シルト質土層（砂質的、3層の漸移層）、5a層：灰褐色シルト層（やや粘性強い）、5b層：明茶褐色～（暗）灰褐色シルト質土層（後者には若干すすけた土粒入るのみ）である。

以上の層の内、かまどの火床本体の堆積層は、e、f層でその上に搔き出したと思われるaa、b層が覆っている。平面的には、火床部分を中心に左右92cm幅の一段掘り窪められた部分があり、ここにaa、b層が堆積している。火床の中央は若干凹む。煙道部分は、ab、da、db層からなり、

g層は、煙道を掘った際に掘りすぎ部分を埋めた層と考えられる。煙道の立上がりは層的には明確に出来なかつたが、径15cm程の煙出しの穴が確認面でみつかつてゐる。袖は、左側の一部が確認できたのみである。なお、火床の左側に床面が焼けた部分がある（最長1.4m、平均幅33cm程）。

遺物は、南東壁中央付近から棒状礫が17点まとまって出土しているが、あとは散発的である。床面ないし床面直上からみつかつた礫29点の大きさは、長さは4.9～18.4cm（平均7.03cm）、幅2.5～6.2cm（平均値4.02cm）、厚さ1.6～3.9cm（平均2.37cm）、重量30～500g（平均107.5g）のものである。

（上野 秀一）

遺 物（第13図1～4、図版11B、13）

1、2は、甕形土器の破片で、1では横走沈線文と縦方向の鋸歯状沈線文がある。3、4は壊である。3では、口唇部直下に1条沈線文がある。内黒処理は3のみ。

なお、床面から出土したS1（図版9B-5）は、黒耀石の小型の原石である。（上野 秀一）

第5号竪穴住居址（第14～17図、図版7B～11A）

A/B-4/5区にまたがつて検出された住居址で、表土（耕作土）を除去した段階でI層とした黒色土が一辺4.5m程の隅丸方形を呈することから確認されたものである。

平面形は、隅丸不整正方形を呈し、コーナー部はゆるやかな丸味がある。規模は5.4×5.2m、壁高は50cm内外である。主軸はN55°Eで、かまどは北東壁のほぼ中央部に設置されている。

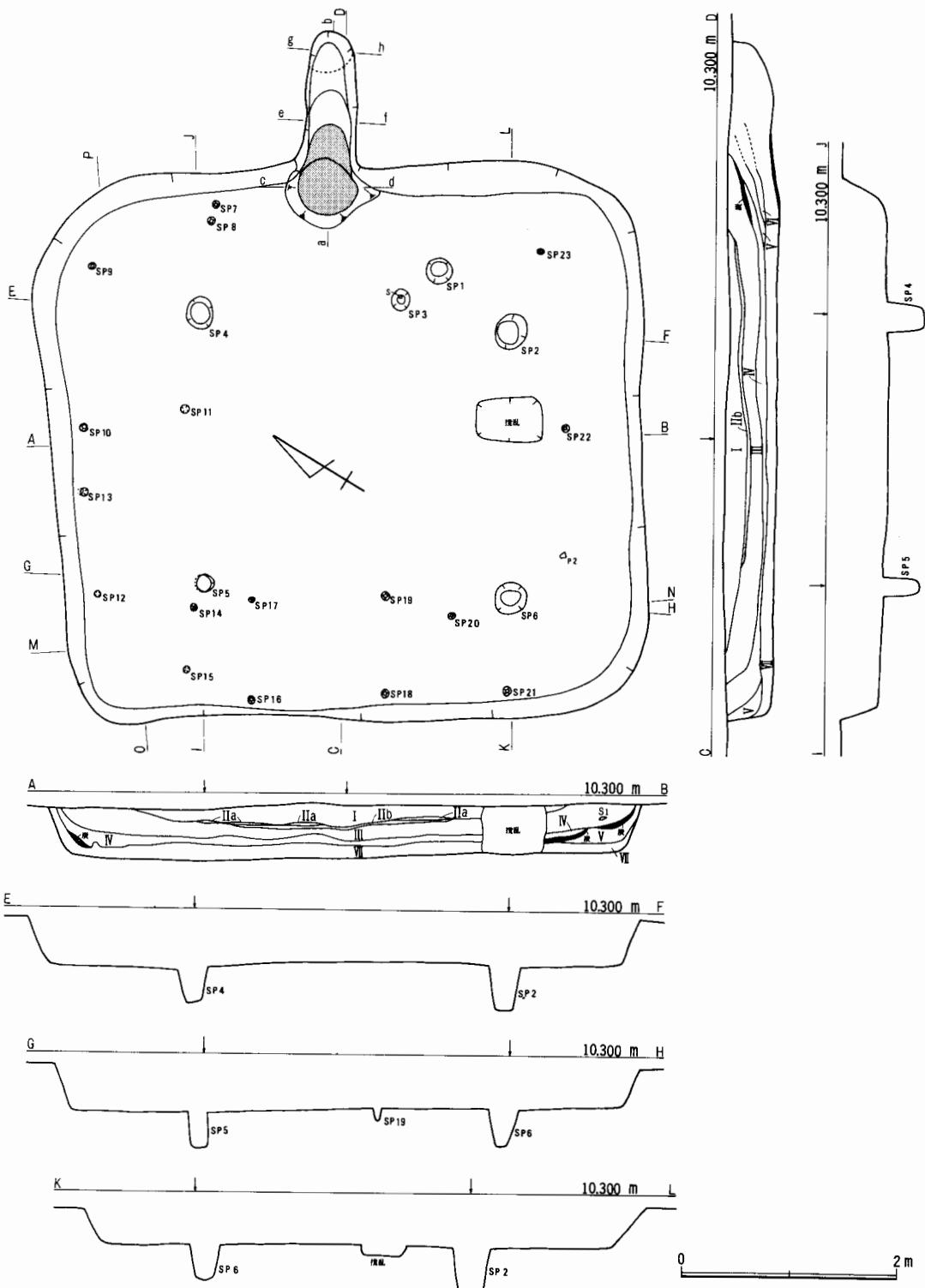
なお、本住居址は、火災にあった例で、床面直上には多量の炭化した木材、屋根の一部を構成したと考えられる茅・焼土等が検出されている。

柱穴は、四隅に主柱穴と考えられる大型のものが各1個づつ計4個（SP2、4、5、6）と、北西壁沿い、南西壁沿いを中心として壁沿いに巡る小柱穴が9個、主柱穴付近を中心に分布する柱穴が10個検出されている。いずれも、床面より軟弱で、炭粒を含んでいた。

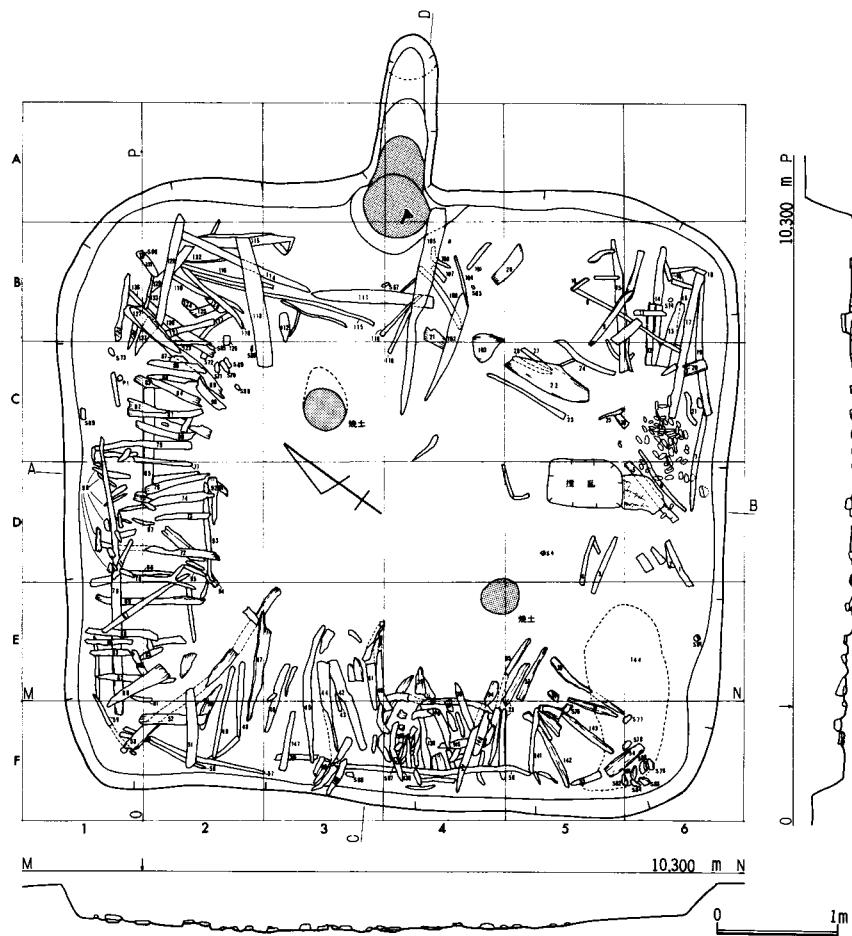
主柱穴の規模は、SP2は33×30cm、深さ40cm、SP4は30×25cm、深さ35cm、SP5は16×16cm、深さ33cm、SP6は30×30cm、深さ36cmを数え、全例円形のプランを呈する。なおSP5のみ径が小さい。

壁沿いに巡るSP7～9、10、12、13、16、18、21の柱穴は、いずれも円形で直径7～9cm、深さ10cm内外の小型のものである。これらは、壁の土留めの横木をさえた杭状の柱であった可能性が高い。また、SP4・5間にあるSP11、SP5付近にあるSP14、15、SP5・6間にあるSP17、19、20、SP2を中心として各々北東、南西に約1m程はなれてあるSP22、23も、壁沿いにめぐる小柱穴と規模・形態は類似している。SP2とかまどとの間にあるSP1、3は、SP1が25×25cm、SP3は20×17cmの大きさで主柱穴と同規模であるが、深さは15cm内外と浅い。

層の堆積は、I層：黒色土層、IIa層：極黒色土層（粘性が強い）、IIb層：灰白色火山灰層、III層：暗褐色粘質土層、IV層：灰褐色粘質土層、V層：黄褐色粘質土層、VI層：黄褐色砂質土層、VII層：灰褐色粘質土層（炭化材を多量に含む）で、VII層上面にも炭化材がみられ、炭化材のほとんどはVII層中にあることから、生活面は床面と一致しているものと考えられる。



第14図 K36遺跡第5号竪穴住居址（1）

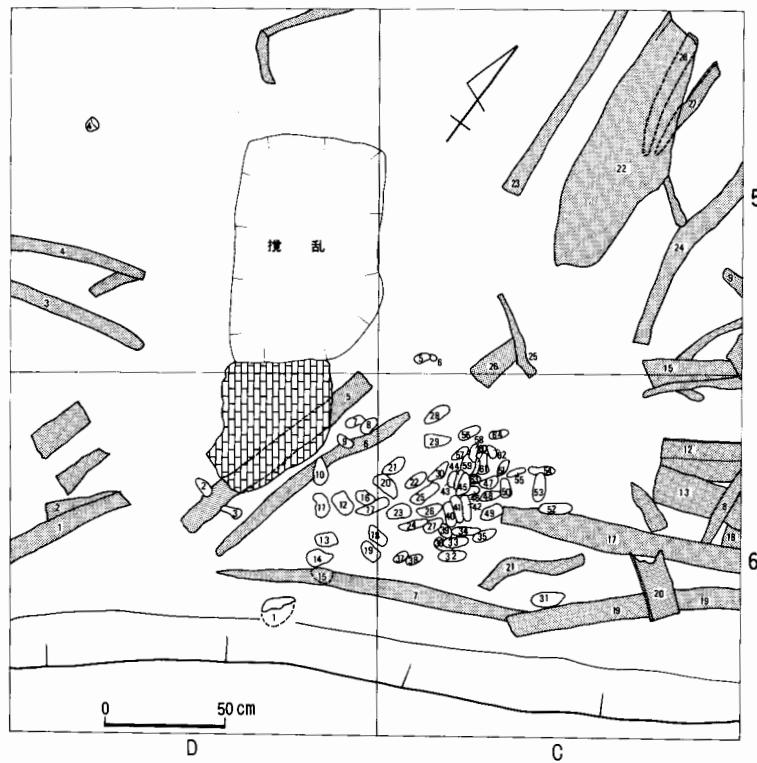


第15図 K 36遺跡第5号竪穴住居址（2）

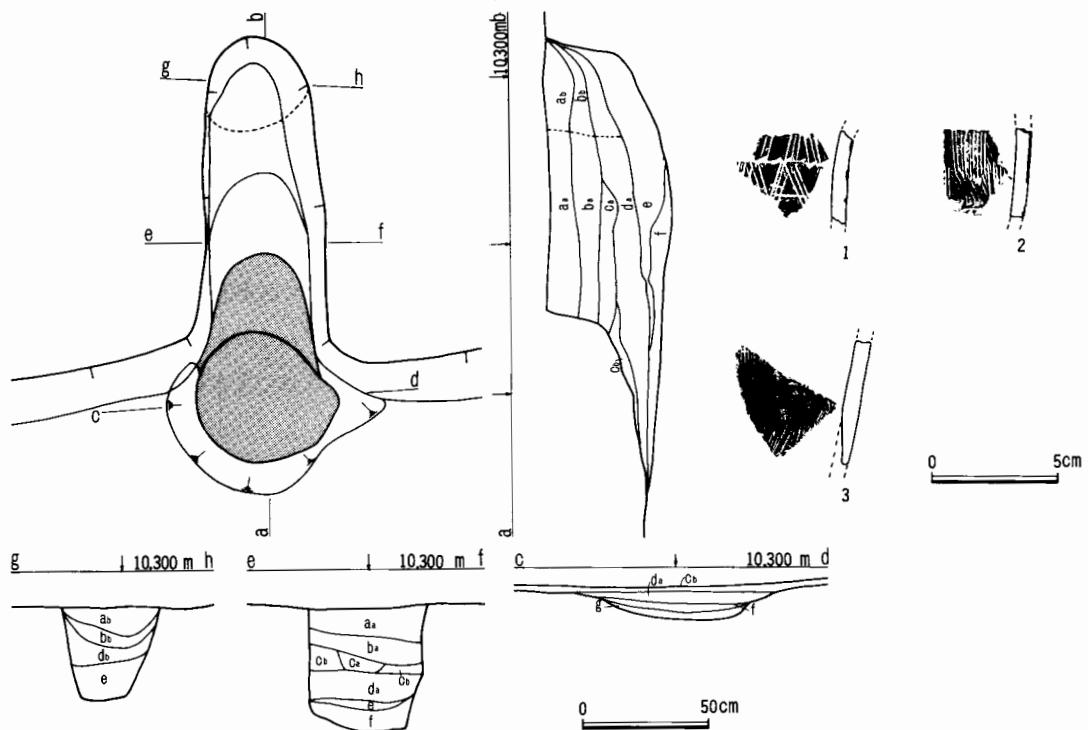
かまどは、北東壁の中央部にあり、煙道は住居址の主軸とほぼ一致し、長さ1.2m、幅55cm、深さ50cmの規模で壁外へ掘り込まれている。火床は、皿状を呈し床面より若干低く、その範囲は壁際に直径55cmの円形の部分と煙道の奥へ30cm程舌状にのびている部分からなる。また、袖部分を構成するとみられる粘土の高まりは一切みられず、住居址の壁の一部と煙道の壁が袖部分に相当していた可能性がある。

層は、aa、ab層：淡茶褐色粘質土層、ba、bb層：淡茶褐色シルト質土層、ca層：灰褐色（泥炭混入）土層、cb層：灰褐色粘質土層、da、db層：明茶褐色粘質土層、e層：灰層（焼けた骨片を多量に含む）、f層：焼土層、g層：炭まじりの黒褐色土層（煤）で、この内aa、ba、caとした層は煙道の天井部分の崩落層、e、f層は煙道の充填層、ab、bb、db層とした層は煙出部分の崩落層と考えられる。

遺物は、床面上から土器片が2点と礫91点が出土している。礫は、さらに覆土層より11点、柱穴



第16図 K36遺跡第5号竪穴住居址（3）（微細図）



第17図 K36遺跡第5号竪穴住居址かまとおよび出土遺物

内から2点出土し、総計104点ある。その分布は、土器については北側のコーナー付近から1点、SP 6付近から1点みつかったもので、礫はSP 4周辺に8点、南側のコーナー部に8点、南東壁中央付近に63点と大きく3グループにわかれて出土している。床面より検出した礫で欠損していないものの大きさと重量は、全長5.5~10.9cm（平均7.63cm）、最大幅1.8~6.8cm（平均3.67cm）、厚さ1.2~3.6cm（平均2.34cm）、重量30~160g（平均92.4g）であり、棒状を呈するものが主体を占める。

炭化材の分布（第15、16図、図版7 B ~ 9 D）

本住居址は、火災にあった例で、炭化材の実測および土壤サンプル採集のため本住居址全体を1×1mの総計36個の小グリッドに分割した。この小グリッドの基線は、遺跡発掘区の基線と一致している。各グリッドの名称は、北東より南西へA~F区、北西より南東へ1~6区とした。

炭化材の分布は、北西壁沿い（B-1/2、C-1/2、D-1/2、E-1/2区）と南西壁沿い（E-1~6区、F-1~6区）に1.2~1.5mの幅で帯状にあり、さらにかまどの手前と東側コーナー部にも若干のまとまりがある。床面中央部には、炭化材はほとんどみつかっていないが、細い炭は点々とある。

炭化材は、長さ60~80cm、直径5~10cm程のもので、割り材ではなくすべて丸太材であり、枝もはらわず用いられた例もある。なお、丸太材の表面のみ炭化し、芯部は腐朽し土圧により押し潰され1cm程の厚さとなった例も多かった。

炭化材の配列状態は、長さ60~80cm、直径5~10cm程の丸太材が壁際から住居址の中心に向か10~30cm間隔で並び、コーナー部分では放射状に並ぶ。

これらの炭化材は、屋根の最頂部より竪穴の外側の地表まで一気に伸びる、いわゆる垂木に相当する。東側コーナー部（B-5/6、C-5/6区）に集中する炭化材も、方向は壁から住居址中央に向けてある。これも垂木に相当する材であろう。

北西壁沿い、南西壁沿いにみられる炭化材中には垂木に加え、それらに直交する炭化材が数本みられる。これは、壁際に沿って1本と、60~80cm程内に入った部分に1本づつあり、垂木を結束していた横木、いわゆる母屋材に相当するものであろうか。

炭化した茅が、南側コーナー（E-5/6、F-5/6区）に150×70cmの範囲（C 144：図版8 C）と南東壁中央付近（D-6区）に35×30cmの範囲で2ヶ所からみつかっている。C 144の例は、南西壁から住居址中央方向に並び、D-6区の茅は南東壁から中央に向いている。

床面中央部には、炭化材がほとんど検出されなかったのは、火災時に屋根中央部が真先に燃ってしまったためと思われ、またC-3、D-4/5区にある床面上の直径35cm、30cmの2ヶ所の焼土は、火災によって堆積したものと考えられる。

以上の事実から、本住居の上屋の構造を推定すると、屋根の頂部に合掌して伸びる直径5~10cm程の丸太材を用いた垂木を10~30cm間隔で並べ、さらに60~80cmの間隔で母屋材で結束し、これを骨組みとして上に茅の束をのせ、屋根としていたものと考えられる。

（羽賀 憲二）

遺物 (第11図1～3、第20図5、図版11B、13)

第11図1～3は、甕形土器の小片で、1、2には密に沈線文がある。

第20図5は黒耀石製の縦長剥片で、バルブ部分は欠損する。

(上野 秀一)

第2節 焼 土

焼土は2ヶ所でみつかっているが、共に第3号と第4号竪穴住居址にはさまれたB-1、2区にある。

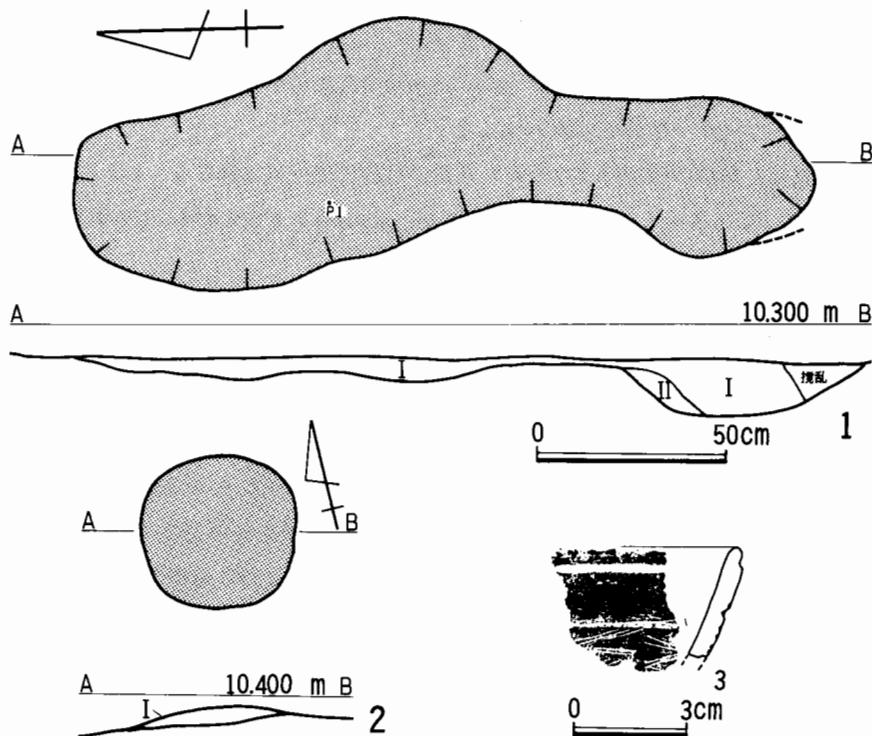
焼土1 (第18図1、3)

現存長 $1.96 \times 0.73\text{m}$ の横長の形態をなすものである。層は、I層：淡赤褐色土層、II層：明黒褐色土層で共に炭および骨を若干含んでいる。なお、本焼土からは、細かな鋸歯状沈線文がついた壺の破片が1点出土している (第18図3)。

焼土2 (第18図2)

確認面での平面形は不整円形で、大きさは $0.41 \times 0.41\text{m}$ 。層は、I層：淡赤褐色土層（炭と骨はほとんど含まない）である。

(上野 秀一)



第18図 K36遺跡焼土1、2

第3節 発掘区出土遺物

ほとんどの資料が、B～D-2／3区の沢状の地形部分から出土したものである。

1) 土器 (第19図、図版12、13)

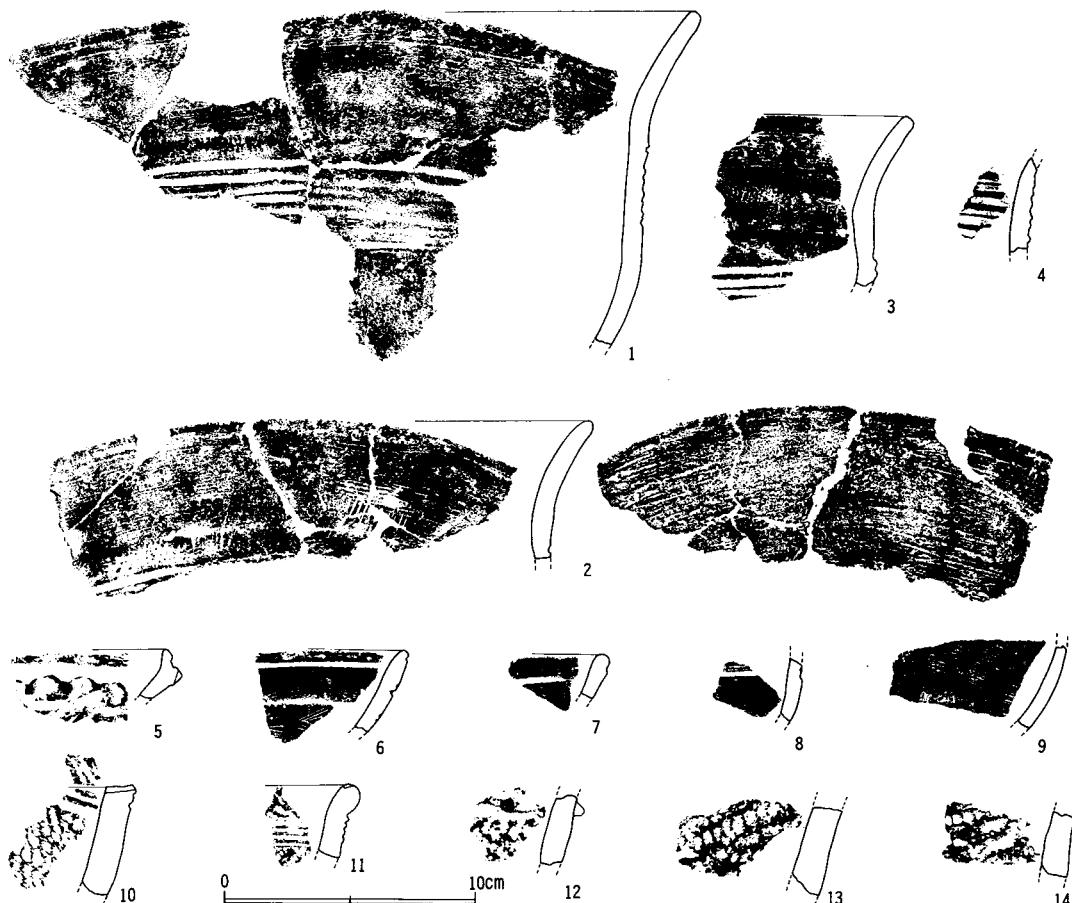
土器は、大きく2群に分けられる。

I群 (第19図10～14)

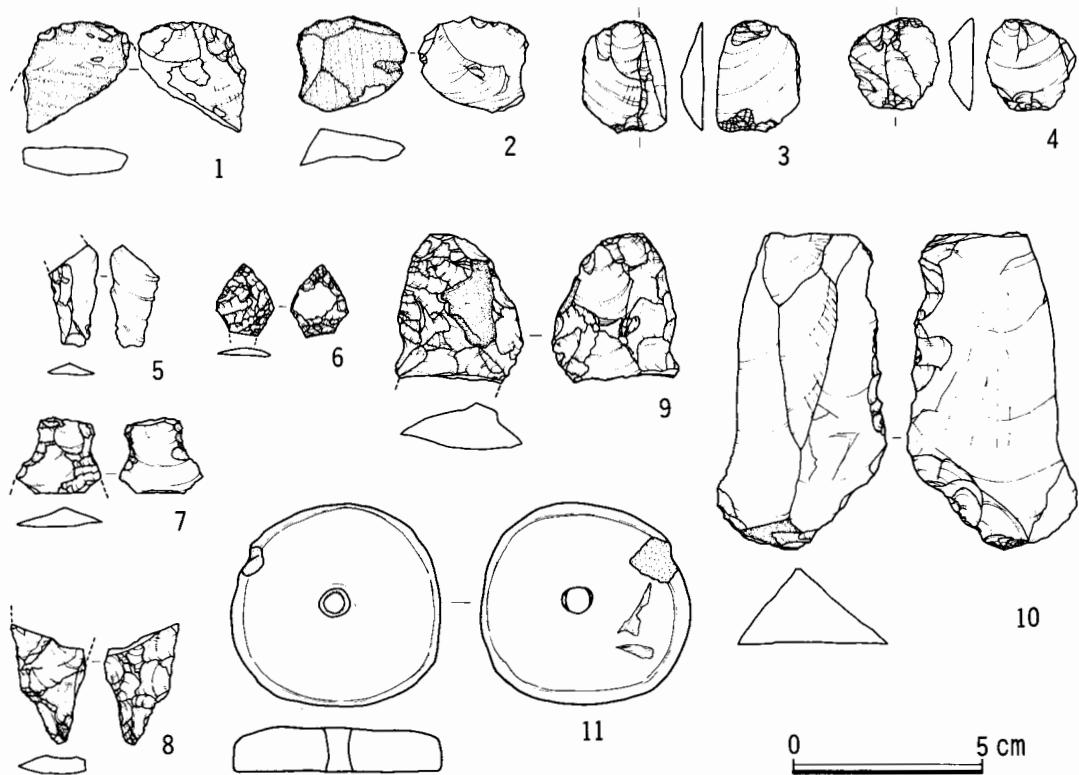
縄文中期の天神山式系統の土器である。

II群 (第9図5、第19図1～9)

本群は、擦文時代の資料で、第19図1～5は甕形土器である。1～4は、同一種の破片で、1でみると口縁部はゆるく外彎し、その屈曲部のみやや段的に横走沈線文がある。5は、口唇部直下に貼付文がある特異な例で、裏面は不十分ながら内黒処理がある。第9図5、第19図6～9は、壺形土器で、5は推定口径17.2cm、底径5.5cm、高さ8.1cmの高台付の器形で、壺部上部には3本の横走沈線文、台部下縁には1条の沈線文がある。なお、裏面の1／2程には内黒処理が施されている。



第19図 K36遺跡発掘区出土土器



第20図 K36遺跡遺構・発掘区出土石器

6～9は小片で、いずれも内黒処理がある。6、7では、口唇部直下に沈線文が横に1条巡り、6では横走する刺突文列を挟んで細い沈線文群が鋸歯状に展開している。本例は、焼土1検出の土器片と同一個体の可能性が高い。
 (上野 秀一)

2) 石 器 (第20図 6～10、図版11B)

6は、黒耀石製の半両面調整の有茎石鏃、7は硬質頁岩製のナイフ状石器の柄部片、8は黒耀石製の両面調整石器（ナイフあるいは石鉤？）の破片、9は硬質頁岩製の両面調整のナイフ状石器の破片と考えられる。10は、硬質頁岩製の大型・厚手の縦長剝片の側縁に不規則な剝離がある削器（？）である。なお、図版9B-12は緑色泥岩製の石斧の破片である。
 (上野 秀一)

結語

以上、各項目別に述べてきたが、以下簡単にまとめてみる。

竪穴住居址については、5軒みつかったが、いずれも推定される旧琴似川からは比較的近接した位置に立地している。かまどの方位は、東向きにあるものが3基（第1、2、5号）、南から南西側のもの2基（第3、4号）である。かまどの火床は、第4号を除いて遺構外に及ぶタイプである。また、第5号は焼失家屋で、数多くの炭化材が検出され、当時の住居の骨組み構造がある程度わかる例であった。ほぼ同方向・同規模の第1号も床面直上から比較的多くの炭化材および炭がみつかっているが、ほとんどがかなり焼けており、その構造までは明らかにできなかった。なお、第2号は煙道のないタイプである。

出土遺物については、第Ⅰ群とした土器は、縄文中期後半の資料で、沢状の地形部分からのみ出土した。沢出土の石器の内、幾つかは本群土器に伴うものであったと思われる。第Ⅱ群は、擦文時代の土器であるが、発掘区の沢状の地形部分から出土した第19図1～4の甕形土器は、宇田川（1979、1980）の編年観に従えば「擦文前期」に相当するものである。一方、それ以外の発掘区の資料と竪穴住居址、焼土から出土したものは、甕では口唇部直下に多段状の肥厚帯があり、口縁部文様帯の下縁には貼付文が巡り、その間には狭い振幅の鋸歯状沈線文が密に施されたもので、宇田川のいう「擦文中期」の後半の資料と考えられる。

本遺跡でみつかった竪穴住居址からは、第2号例を除いて、床面ないし床面直上から完形・半完形に近い土器は出土しておらず、その作られた年代についてはあきらかでないが、床面直上から擦文中期後半の半完形の高環形土器が出土した第2号例および床面付近検出の土器破片から推定して、いずれも後者の時期——擦文中期後半の所産である可能性が高いと判断される。旧琴似川水系内では、いままでは発掘調査でみつかった竪穴住居址は未報告のM353遺跡を除いて、いずれも擦文前期ないし中期前半のものであり、従ってこの時期の例は初めてといえよう。

なお、本遺跡に隣接したサクシュコトニ川遺跡（吉崎編1986）においては、フローテーション法を用いた動植物遺存体が多量に検出され、当時の生業もかなり明らかになっている。本遺跡においても、かまど・焼土・焼失家屋の床面等から土壤サンプルを採取しているが、本報告書刊行までに、そのデーター処理は終了していない。完了した時点で、別な形で報告したいと考えている。

ところで、第1章で詳述したように、今回の発掘調査のケースは、土地の売買契約の時点で重要説明事項の一つである文化財保護法関係の内容が欠落していた例で、この点については、昭和61年3月に建設省を中心に構成された「宅地開発事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する研究会」がまとめた『宅地開発事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する手引き（暫定版）』において、土地の売買契約の早い時点で埋蔵文化財についての照回を行ない、協議すべきことがうたわれている。

（上野 秀一）

[引用文献]

宇田川洋 1979 「'70年代擦文文化の研究」『どるめん』22

宇田川洋 1980 「北海道先史時代史」『北海道5万年史』

吉崎昌一編 1986 『サクシュコトニ川遺跡』



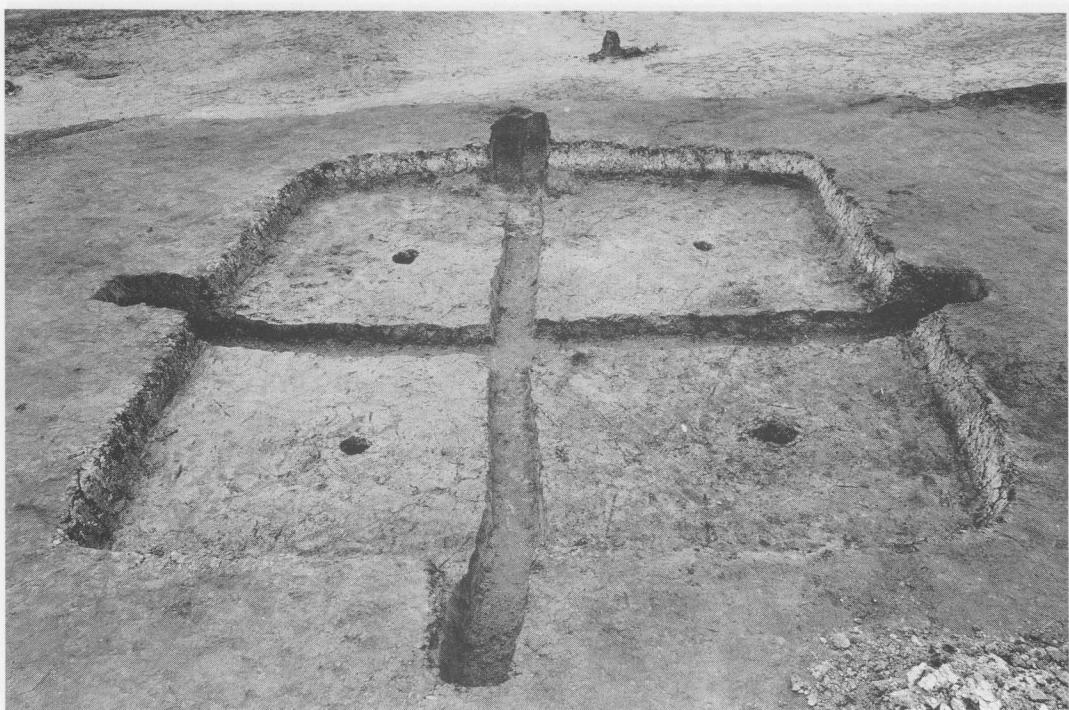
K 36遺跡付近空中写真（昭和56年撮影）



A K36遺跡発掘区近景（1）（北東より）



B K36遺跡発掘区近景（2）（沢跡：南東より）



A 第1号竪穴住居址（西より）



B 第1号竪穴住居址かまど（西より）



A 第2号竪穴住居址（西より）



B 第2号竪穴住居址かまど（西より）



A 第2号竪穴住居址（確認面：北より）



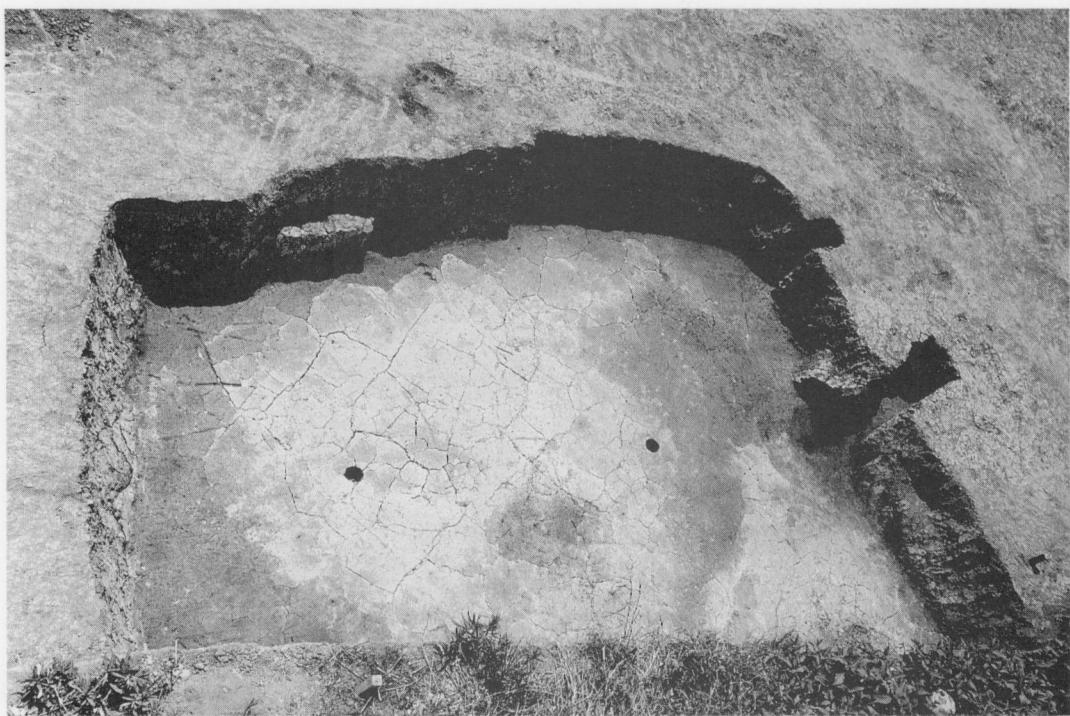
B 第3号竪穴住居址（確認面：北より）



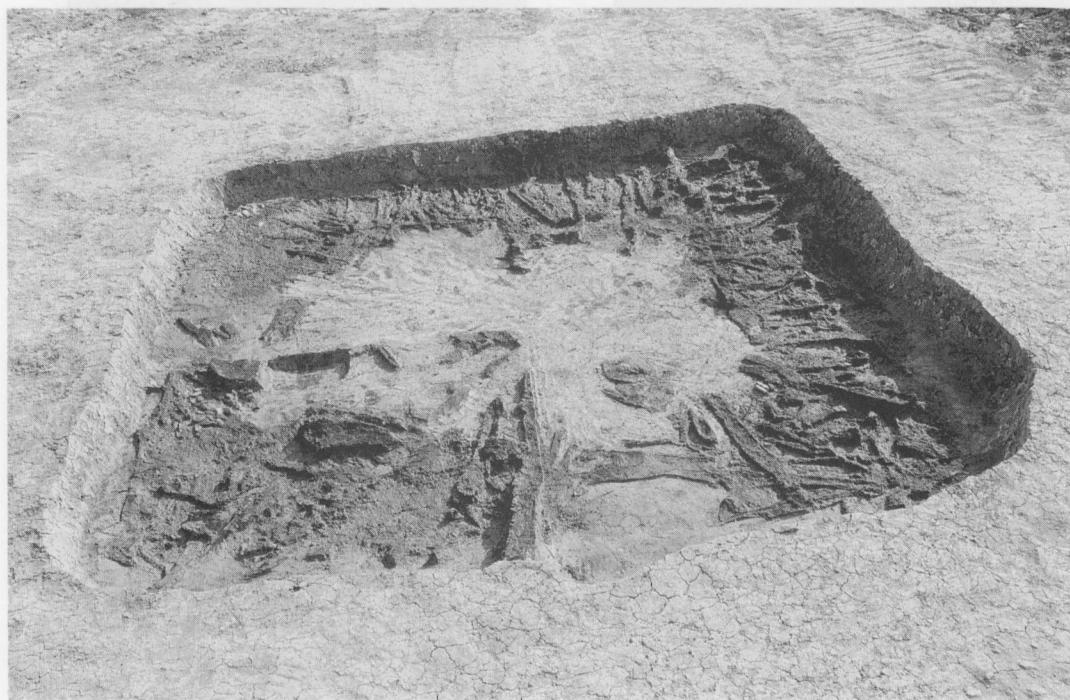
A 第3号竪穴住居址（北より）



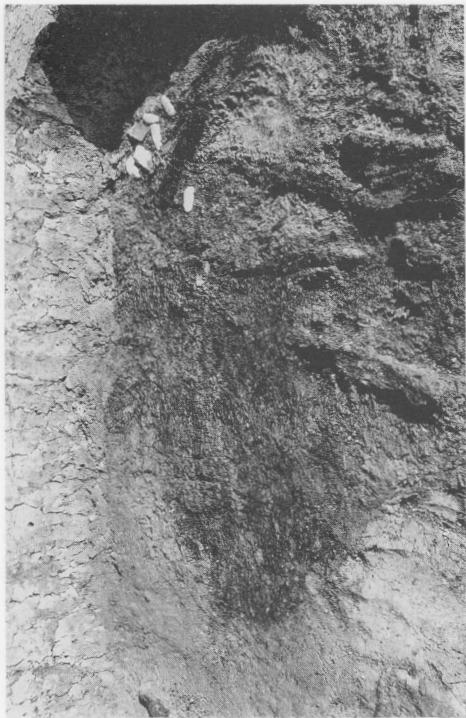
B 第3号竪穴住居址かまど（北より）



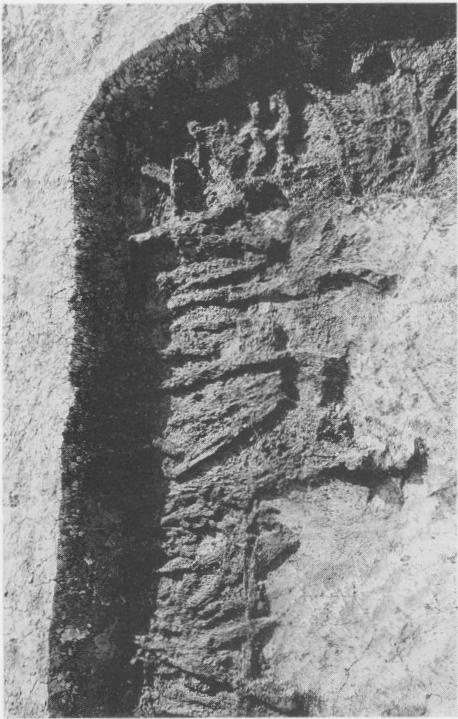
A 第4号竪穴住居址（北西より）



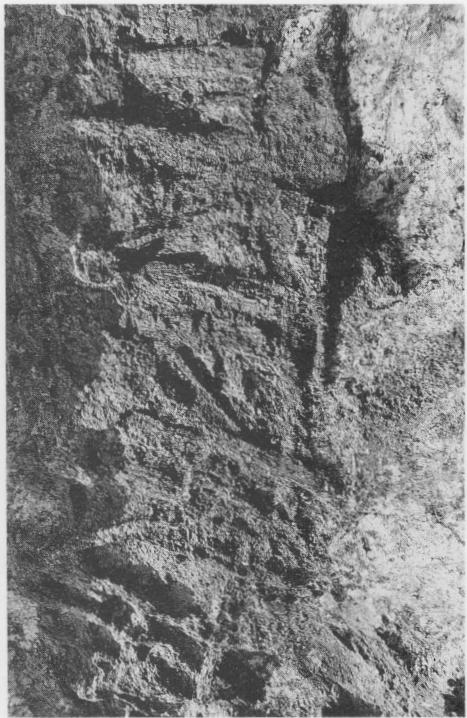
B 第5号竪穴住居址（1）（北東より）



A 第5号竪穴住居址炭化材出土状況（E/F-5/6区）



B 第5号竪穴住居址炭化材出土状況（B/C-1/2区）



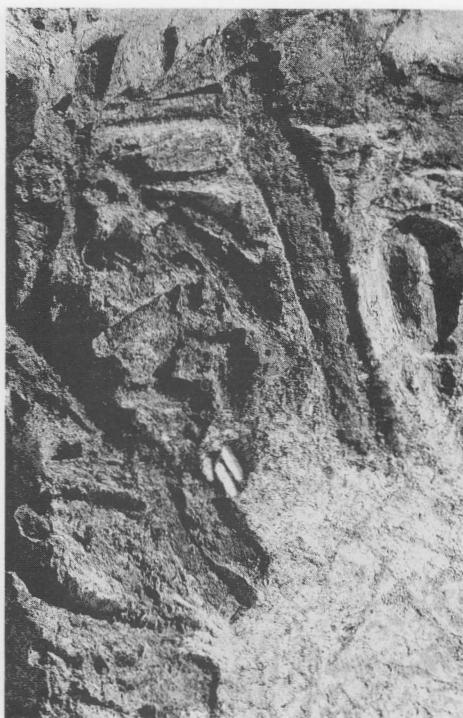
C 第5号竪穴住居址炭化材出土状況（F-4区）



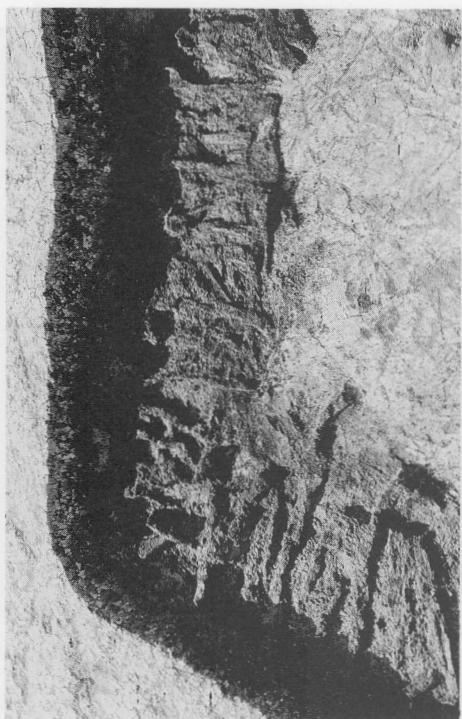
D 第5号竪穴住居址炭化材・礫出土状況（B,C,D-6区）



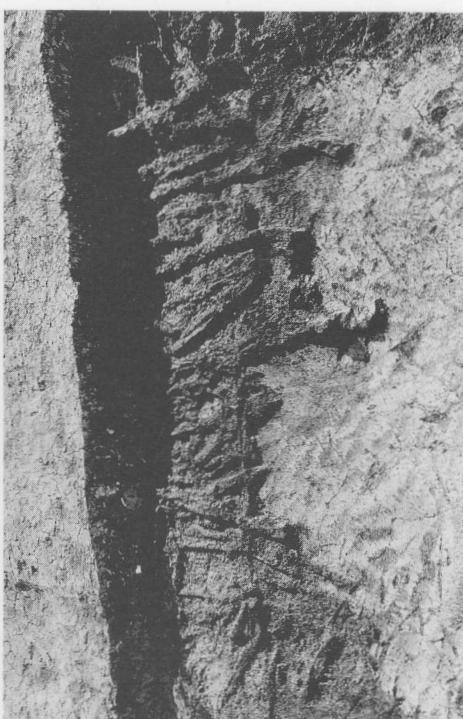
B 第5号竖穴住居址炭化材出土状况（D-E, F-1 / 2区）



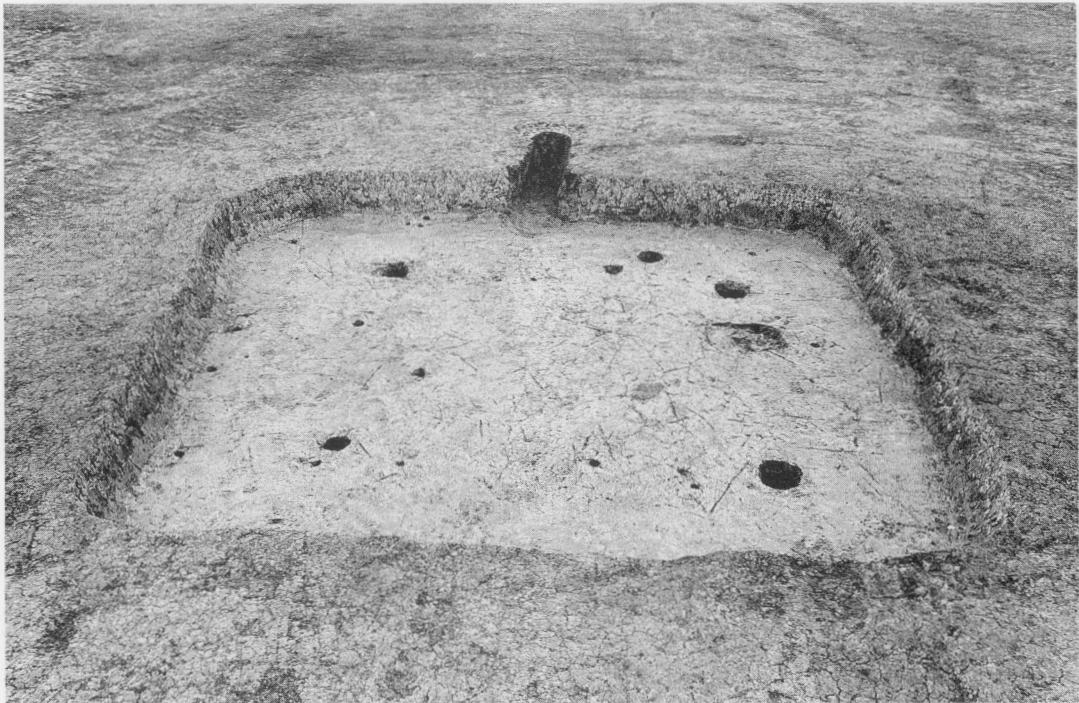
D 第5号竖穴住居址炭化材出土状况（B/C-2区）



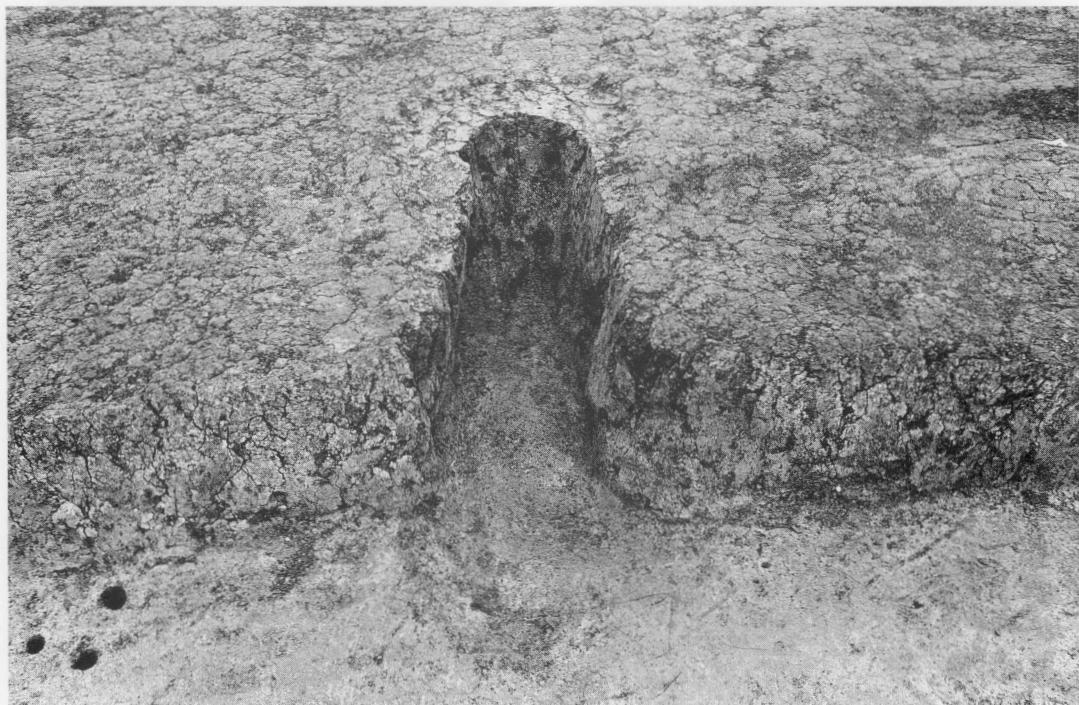
A 第5号竖穴住居址炭化材出土状况（D-E, F-1 / 2区）



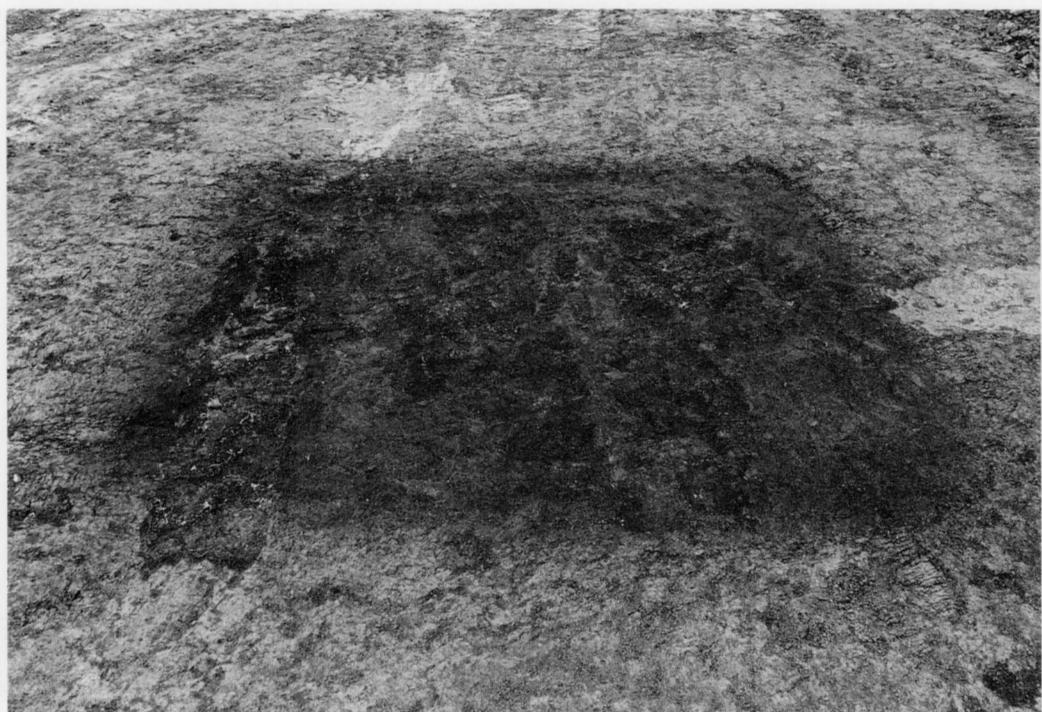
C 第5号竖穴住居址炭化材出土状况（F-4区）



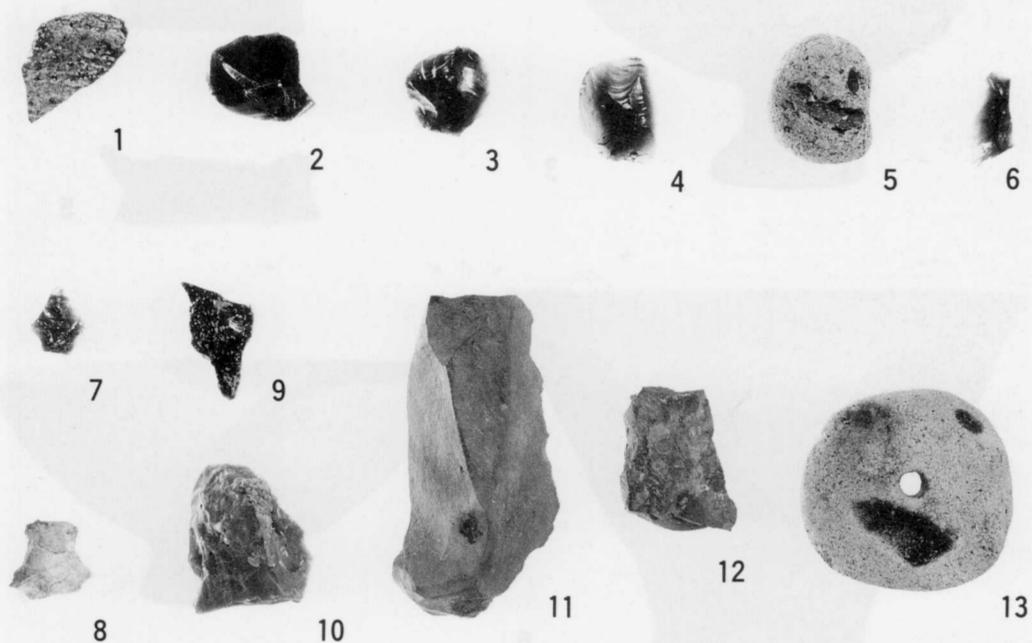
A 第5号竪穴住居址（2）（南西より）



B 第5号竪穴住居址かまど（南西より）



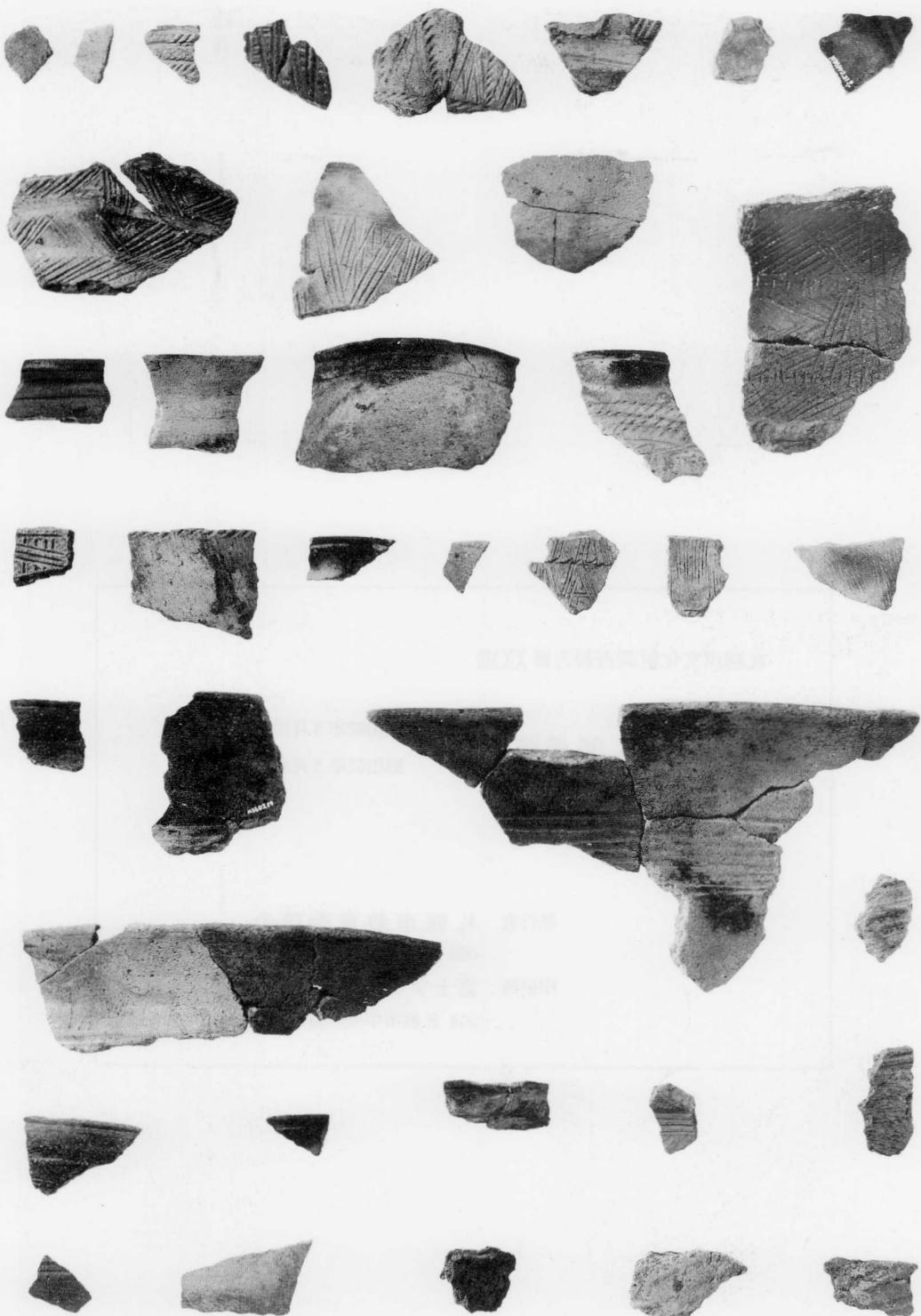
A 第5号竪穴住居址（確認面：北東より）



B 竪穴住居址・発掘区出土石器ほか（縮尺1：2）（1、2：第1号、3、4：第2号、5：第4号、
6：第5号、7～12：発掘区、13：第3号）



竪穴住居址・発掘区出土土器 (1) (縮尺1:3) (1~5:第2号、6:第3号、7:発掘区)



竪穴住居址・発掘区出土土器（2）（縮尺1：3）

札幌市文化財調査報告書 XXXIII

K 36 遺跡

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発行者 札幌市教育委員会

060 札幌市中央区南1条西14丁目

印刷所 富士プリント株式会社

064 札幌市中央区南16条西9丁目